デジタル・デビル・ストーリー 女神転生

西谷 史

アニメージュ文庫 N—013
定価380円

デジタル・デビル・ストーリー

女神転生（めがみてんせい）



西谷 史（にしたに あや）

昭和30年三重県生まれ。北海道大学経済学部卒業。過去、ＳＦショート・ショートやニュービジネス評論で活躍してきたが、今回は豊富なコンピュータの知識を生かして、初の本格長編ＳＦに挑戦。



北爪宏幸（きたづめひろゆき）

昭和36年東京都生まれ。東京デザイナー学院アニメ科卒。「機動戦士ガンダムＺＺ」でキャラデザイン・作監を担当している気鋭の若手アニメーター。現在は作画スタジオ・ぱっくの社長である。




「ヨッド、ヘー、ヴァウ、ヘー」つぶやきながら、中島はキーボードを叩き続けている。（序章・P29より）

ディスプレイには、ギリシャ彫刻のような、ブロンズの凜とした青年の像が映し出されていた……。（第一章・P58より）







ケルベロスは弓子の屍を抱いた中島を背に、丘陵に続く
道を疾風のごとく駆けていた。（第四章・P127より）





中島は、天に向けた自らの手に、朱の燐光を発する一振りの剣が握られているのを知った。（第五章・P162より）



「弓子……」中島は、おそるおそる声をかけてみた。(終章・P 166より)

デジタル・デビル・ストーリー

女神転生

西谷　史

天才プログラマー・中島朱実は、コンピュータを使い〝デジタル・デビル〟を生み出してしまった。古来、悪魔は特定の場所にしか出現できないという制約を負っていたが、デジタル・デビルは、コンピュータのオンラインを利用することで世界中のいかなる地点へも一瞬のうちに到達できるのだ。発達したコンピュータ社会は、思いもかけない新しい恐怖をもたらしたのである。

自らが生んだデジタル・デビルによって恋人・白鷺弓子を失った中島は、この恐るべき敵との戦いを決意するが……。

コンピュータ時代のニューウェーブ伝奇ＳＦシリーズ、ここにスタート！

目次

序章

授業が終わるのを待ちかねたように、長身の生徒が教室に飛び込んできた。
「中島ってのはお前か？」
脅すように、机をたたく。
「そうだけど」
震えを懸命にこらえると、中島は相手の視線を受けとめた。
近藤弘之、空手部の主将。中島が在籍する十聖高校のボス的な存在だ。
彼に逆らったばかりに、暴力的な手段で転校を余儀なくされた生徒は多い。
『だがいったい僕がなにをしたというんだ』
背後で含み笑いをもらしたやつがいた。
振り向くと、猫のように魅力的で悪意をこめた視線が自分に注がれている。
同じクラスの高見沢京子だ。
その瞬間、中島はすべてを理解した。
「待て！」

言う間もなく、みぞおちにパンチがめりこんだ。
「うっ」
悲鳴をあげることもできず、床に両手をついてうずくまったところへ、近藤のローキックがとんでくる。
下腹と胸に二発ずつ。ダメージを与えながら、気を失わせることのないよう、十分に手加減された蹴りだ。
高校生とはいえ相手は喧嘩のプロ。
級友達は、かかわりあいになるのを恐れるように、一人二人教室の外へ出ていく。
「なんで、僕がこんな目に」
吐きだすように言った口へ、靴の先がねじこまれた。
涙と唾液が一緒になって頰を伝わる。
「京子に手ェ出すって、いい度胸してるじゃないか。えっ、中島よォ」
それまで中島がいたぶられるのを、面白そうに眺めていた京子が、ぶらりと近づくと、彼の上唇を指ではじく。
「女みたいな顔していつ、いっちょまえに、キスしようとしたんだから」
「嘘だ。僕は……」
が、中島の叫びは傷ついた唇をわずかに震わせただけだった。
近藤は彼を抱きおこすと、みぞおちに再度拳を打ち込んだ。

抱きかかえられた中島は、倒れることも許されない。
ヒステリックな笑い声をあげる京子の目が恍惚(こうこつ)に潤(うる)んでいる。
「ちくしょう、殺してやる」
一瞬中島の目に兇暴(きょうぼう)な光が宿った。
「なんだよ、その目は」
近藤が怒声(どせい)をあびせる。
負け犬に瞬時のひるみを見せた、自分に腹立たしさを覚えた声でもあった。
「ねえ、もういいんじゃない」
いなすような京子の声がする。
自分の役割を演じ切れる器用な声だ。
「おう、お許しがでたぜ」
近藤は唇をゆがめて笑った。
最後の拳が頬に炸裂(さくれつ)する。
中島は力なく頭をたれた。

「坐っていこうよ」
級友の高井健一が、ちょうど二つ並んで空いた席を、いかつい顎(あご)で示した。
「えっ……ああ」

中島は吊革に体重を委ねたまま、目を宙に走らせている。

十聖高校のある国立から西荻窪まで、国電で八駅。約二十分間のくつろぎである。

私立十聖高校。毎年T大に二十名以上を現役合格させる、受験の名門校として知られている。

けれども同校の内情を知る者は、その極端な生徒の二層化方針に、首をかしげざるをえない。

施設、カリキュラム、教材、すべてにわたり過分に保護された選抜クラスと、その他大勢の一般クラス。

二割に満たない選抜の生徒達は、一般生徒のやっかみのまとになっている。

そのやっかみが引きおこす多少の校内暴力事件も、二層化方針のもとでは、ある程度しかたのないことかもしれない。

中島も高井も、その選抜クラスにいた。

ほっそりした中島。詰め襟をセーラー服に着替えたら、美少女として十分通用しそうに思える。

高井の風貌は、何から何まで中島と好対照だ。中学時代に柔道で鍛えたという、がっしりした体軀に太い指。

黒縁の眼鏡をとると、童顔がむきだしになる。

「それにしても、今日の近藤は異常だったよな」

「あいつは女の前では、エネルギーが倍増するのさ」

中島は片眉をあげて、投げやりな答えを返した。

「まったく、なんで京子みたいなやつが選抜クラスにいるんだか。だいたいお前が京子に手を出すわけないもんな」
「逆なんだよ……、実際は」
「京子の方がふられたってわけか」
納得したように、高井はうなずいた。
中島に好意を寄せる女生徒は多いが、いまだに彼の心を射止めた者はいない。
高井はそれを、中島の選り好みが激しすぎるせいと解釈していた。
国電が武蔵境駅を出る。
高井は黙り込んだ中島の横顔を見た。
選抜クラスの中では、中島は決してできる方ではない。
全科目にまんべんなく好成績を残す高井に比べ、中島は明らかに理数系の頭をしている。
文系の科目でなんとか見られるのは、世界史くらい。
あとは、一般クラスの生徒と大差ないレベルなのである。
運動神経も、さしていい方ではない。
ただ、ことコンピュータに関する知識については、教師も含めて、学内に誰一人として彼にかなう者はない。
「学内どころか、日本中捜したっていないんじゃないか」と高井は思う。
中島がほんの数日で作りあげてくるコンピュータゲームは、とにかく面白い。

どんな人気ゲームも、中島のソフトを楽しんだあとでは、陳腐に思えるほどだ。
CAIルーム〔注1〕で、ディスプレイを見つめキーボードに指を走らせる中島の表情には、狂気じみたところさえある。
「俺が秀才なら、中島は天才の典型みたいなものだ」
「悪魔か」
その時、中島が、ぼそりとつぶやいた。
「えっ？」
「いや、なんでもない」
「………」
何か言おうと、高井が口をすぼめた時、電車は西荻窪駅についた。
「じゃあな」
背中を丸め、思いつめたような表情で、中島は駅の階段をおりてゆく。
「まったく、何を考えてんだか」
首をすくめると、高井は網棚のカバンを手にとって、二人分の座席にどかりと腰をおろした。
商店街の裏手。最近建ったばかりのマンションには、分譲中の垂れ幕が下がっている。
中島は前かがみに歩きながら、しきりに唇を動かしていた。
人には暗記に夢中な高校生くらいに見えたかもしれない。

が、すれ違いざまに彼の唇から洩れる言葉の断片を耳にした人は、いぶかしげに振り返る。

それが高校生におよそ似合わない、気味の悪い呪文のように、聞こえたからである。

ブロック塀からとびだした桜の枝が頬に触れて、つぼみが揺れた。

中島はかまわず、目を地面に落としたまま歩き続ける。

彼の目がようやく正面に向けられたのは、ひときわ目立つ高層マンションの前でだった。

カムフラージュされた鍵穴に電子キーをさしこむと、硬質ガラスの自動ドアが、重厚な音をたてて左右に開いた。

カナディアン大理石を基調にした豪華な、けれどもどことなく無機質なエントランス。足を踏み込んだ時、中島はすっと息を吸い込んで背筋を伸ばした。

エレベーターに乗り込むと、十三階のボタンを押す。

気圧の変化に身体の随所が、痛みを伴って、不快な出来事を思い出させる。

一三〇二号室のドアには、「NAKAJIMA」とレリーフした銅板がはりつけられている。

ベルを押してみたが、中から応える気配はない。

ため息をついて、中島は尻ポケットのキーを探りあてた。

ドアを開け、乱雑に靴を脱ぎ捨てるなり、バスルームへ向かう。

洗面所の鏡に映った顔は、切れた唇が水泡状にはれあがり、あまり見られたものではない。

左頰も、こころもち黄色くあざになっている。

しばらく鏡を見ていた中島は、唐突に蛇口を一杯に開き、両手で顔を洗った。



リビングのソファに倒れこんだ時、サイドテーブルの上にメモが置かれているのに気付いた。
「遅くなります。夕食はレンジで暖めて——」
最後まで読まずに、紙片を手で握りつぶす。
「どうせ同じ文句を書くなら、いっそ印刷でもしておきゃいいのに」
商社に勤める父親がロサンゼルス支店に赴任して以来、母親はますますデザインの仕事に脂がのってきたようだ。
最近は帰宅が夜中になるときも珍しくない。
母親の顔を思い出したとたん、くすぶっていた怒りがぶり返してきた。
突然、電話が鳴った。
どうせ母親あてに決まっている。
鳴り続ける電話を横目でにらんで、中島は自分の部屋にひきこもった。
ピンナップ一枚はられていない、殺風景な部屋である。
窓側をのぞく三面の壁の大部分は、天井までとどくスチール製の本棚でうめられている。
アニメ誌やコミックスが相当な面積を占めているのが、いかにも高校生らしいところだが、本棚の隅に奇妙にくすんだ印象を与える部分がある。
「死者の書」「ナコト写本」など、魔術・呪術関係の書物が並べられている。
スチールデスクの上には、フル装備のパソコンが置かれている。
その横には、魔術概論「ゴールデンドーン新説」。

革の背表紙は熟読に耐えかねてすりきれている。
中島は椅子を引いて、ディスプレイを前にした。
壁際のスイッチに手を触れると、スピーカーからデビッド・カヴァーディールのまとわりつくようなボーカルが流れはじめる。
中島はキーボードに指を走らせた。
――LIST〔注2〕
長大なプログラムが画面を駆ける。
音楽にあわせるかのように、中島はゆるやかに右腕を脈うたせている。
けれどもプログラムリストを追う彼の目は、先ほどまでとはうってかわって、狩人のように鋭かった。
中島が魔術に興味を持ちはじめたのは、ふとしたきっかけで「ゴールデンドーン新説」を読む機会を得たときからだった。
稚拙（ちせつ）な翻訳文にいらだちながらも、一応最後まで読み通した。そこに魔術という後ろめたさを秘（ひ）めた魅力ある世界が、不思議なリアリズムを伴って、冷徹（れいてつ）に表現されていたからだろう。
気になる箇所を二度三度と読み返すうちに、彼は突然天啓（てんけい）に触れたかのようにある事実に気づいた。
魔術理論とコンピュータ理論の驚くべき類似である。
コンピュータと魔術。

一見何の脈絡もなさそうな二つの世界。

だが、両者の類似性は、中島の発見を待つまでもなく、情報工学、魔術、両サイドの研究者により、古くから指摘されてきた。

人工知能の研究で有名な、ＭＩＴ（マサチューセッツ工科大学）のチャールズ・フィード教授もその一人。

中島はさっそく教授の組織するＩＳＧ（インタナショナル・サタニスト・ガーデン）に加入した。

そしてこの数カ月、中島は悪魔を呼び出すためのプログラム作りに没頭していた。

完成まで、あとほんの一息。

柱になる部分はあらかたプログラミングし終わっている。

あとはサブルーチン〔注3〕を一部追加するだけだ。

ただ一方で中島は、完成したプログラムを実行すべきかどうか、ためらっていた。

理論どおりいけば、悪魔は必ず出現する。

しかし、自分は悪魔にいったい何をさせようというのか。

だが今日の出来事は、極めて単純明快な目的を準備してくれた。

「気の毒だけど実験台になってもらう他ないさ」

「ひき蛙の足は DATA3780〜3990 で代用。これをバッファ〔注4〕にためておいて、図形を

プリントアウトする前に呪文を唱える。ヨッド、ドゥール、ダウル、セット。どういう意味なんだ、この呪文は？」

中島はモデム電話〔注5〕をとりあげると、マサチューセッツ州アーカムへ電話をかけた。コンピュータ通信でISGのホストコンピュータを呼び出す。

回線がつながると、ディスプレイには悪魔ルシファーのイメージグラフィックが浮かんだ。中島は人工知能クラフトを呼び出し、状況を説明すると、問題の呪文について尋ねた。

英語はそれほど得意ではない。

何度も画面に〝？〟が浮かぶ。

—— OK. I UNDERSTOOD

ようやくクラフトが状況を把握したようだ。

—— WHAT THE SENTENCE MEANS?

—— IT'S ONLY COUNTER MAYBE!

呪文は単なる時間計測器にすぎないという意味だろうか。

—— THANK YOU CRAFT

不意にノックの音がした。

「どうぞ」

中島の目はディスプレイに向けられたままだ。

ノブが回って、外出着のままの母親が入って来た。
「夕食ちゃんととったの？」
「………」
キーボードの上を指はすべり続ける。
「あら、その唇どうしたの？」
指が止まった。
「ぶつかったんだ。サッカーのゴールポストに」
母親はそばにいた。
オレンジ色のマニキュアがディスプレイに映っている。
彼女は中島をK大の医学部に入れたがっていた。
けれども、あまり強制すれば逆効果なのは目に見えている。
小さい頃から、気弱なくせに妙に頑固なところのある子だった。
「薬つけておいた方がいいんじゃないの」
「大丈夫さ、たいしたことないよ、母さん」
中島は無作為にキーボードを叩いた。
「ピー」
画面がエラーを表示する。
とりつくしまを失って、母親は半ば諦めたように、部屋を出ていった。

午前三時。
「よし、できた！」
両手で膝をたたき、中島は椅子から腰を浮かせた。
――RUN〔注6〕
ディスクがうなり、画面に異様な文字が見え隠れする。
だが五分もたたないうちに、ディスプレイはエラーメッセージを表示したまま静止した。
――MEMORY IS OVER
プログラムが長大すぎるのか、変数領域でメモリーを侵蝕しすぎるのか。
「いいさ、もともとパソコン一台じゃ無理なんだから。学校のホストコンピュータを使えばメモリーは十分だ」
中島の目はギラギラと輝いていた。

その週の土曜、午後七時。
宿直の飯田教諭は、CAIルームに人の気配を認めてドアを開いた。
「誰だ。こんな時間に」
CAI用の端末機をいじっていた生徒が顔をあげる。
コンピュータディスプレイの光を受け、生徒の顔は異様に輝いて見えた。

「なんだ、中島。電気もつけないで」
教師の口調が和らぐ。
同年輩の高校生には、嫉妬すら抱かせる中島の整った顔立ちも、教師にとっては信頼のおける優等生の顔でしかない。
「プログラムがなかなかうまくいかなくて、でももうすこしで終わります」
中島の声は、ディスクドライブの回転音にあわせるかのように、心持ち金属質に感じられた。
「熱心なのはいいが、夜間この教室を利用するときは、申請が必要なことくらい知っているだろう。見つけたのが俺だからよかったものの……」
飯田は軽い小言をいいながら、照明のスイッチを入れた。
「なんだ、これは」
明るくなったCAIルームに、飯田のすっとん狂な声が響く。
中島の座った机を中心に、床一面に赤と白のチョークによる幾何学模様が描かれている。
「ソロモンの六角形ですよ」
「ソロモンの六角形？　何だか魔術めいた話だな」
中島は飯田の冗談混じりの問いかけにはとりあわず、端末用パソコンのキーに指をすべらせた。やがて、硬質ガラスにしきられた向こうのマシンルームで、ホストコンピュータが稼働しはじめた。
「よし、ようやくバグがとれた。完成」

立ち上がると、中島は教師と向かいあった。少女を思わせる切れ長の目が、今は悪魔の笑みを浮かべている。

切れた唇から赤い血がにじみだし、顎に糸をひいた。

「説明してもらおうか、中島。ホストコンピュータまで動かして、何のプログラムを組んでいたんだ」

中島は額にかかった前髪をはらった。

薄い舌がのぞき、乾ききらない鮮血をなめる。

「悪魔を呼び出すプログラムを組んでたところです。この六角形は悪魔から身を守るためのものです。間もなく悪魔が降臨します。先生もこの中に入ったほうがいい。八ツ裂きにされても知りませんよ」

「何を狂ったことを言ってるんだ、中島」

「狂ってるのはどっちでしょうね？　先生。見てくださいこの唇を、顔のあざを。空手部の近藤です。情婦きどりの京子もいました。学校は、あいつらみたいな狂犬を野放しにしておいて、何一つ対策を打とうともしない。教室の中で僕がどんな目にあおうと、教師も生徒も知らんふりだ。暴行の事実は歴然としているのに、なんの処分もしない。先生たちは、あいつらが卒業していくのを待っているんでしょう。目をつぶってさえいれば禍いは自然に去っていく。ほんの二、三年の辛抱ですからね。でも僕の高校生活は、今しかないんだ。これ以上あいつらの好きなようにはさせない。僕は悪魔を呼びだし、あの虫けらどもを処刑してやるんだ」

話しているうちに興奮してきたのか、荒い息遣いに肩が上下している。

少し間があいた。

中島はゆっくりとキーボードに向かう。

——RUN

ホストコンピュータの磁気テープが小刻みに動きはじめた。

「それにしても、悪魔をコンピュータで呼び出そうなんて、いかにも秀才の君らしい考え方だな」

ディスプレイが最後のコマンドを表示した。

飯田は空気の重みを振り払おうとするかのように、無理に口もとを歪め、笑った。

「コンピュータ理論は、実は魔術の考え方と酷似する部分が多いんです。おそらくこの世で一番最初にコンピュータの原理を考え出した人は、錬金術やカバラ理論に精通していたはずです。あまり知られていませんが、降魔術で使う呪文・いけにえ・魔方陣などは、二進法での数値化に容易になじみます。降魔というのはアティルト界で悪魔を形成してる物質を、現実のアッシャー界に転生させることなんですが、コンピュータのメモリー（RAM）〔注7〕はまさにこの作業にぴったりですしね……」

どこからか流れこんだ冷気が、不意に飯田の足を捉えた。

冷気はまるで生きた蛇のように、ぬめぬめと飯田の全身にからみつく。

微かに異臭を感じたとき、飯田の顔からは笑いが消えていた。

教室の照明が点滅し、ＣＡＩルームは暗闇に包まれた。
しゅるしゅるとディスクドライブの回転する音だけが響く。
やがてパソコンが低い、くぐもったうなり声をあげた。
「ヨッド、ヘー、ヴァウ、ヘー」
飯田の耳には確かにそう聞こえた。
地震のように部屋が激しく揺れ動き、サッシの窓ガラスにピシリとひびが入った。
「ヨッド、ヘー、ヴァウ、ヘー」
つぶやきながら、中島はキーボードを叩き続けている。
—— KILL!! KONDO HIROYUKI, TAKAMIZAWA KYOKO
本能的な恐怖から、飯田はパソコンの電源スイッチに手を伸ばした。
「バカな真似はよせ、おい。君が望むなら近藤を停学処分にすることくらいできる。早速来週の理事会にかけようじゃないか」
「そして、僕はまたあいつらに、にらまれるってわけですか」
電源を切らせまいと、中島は両手で飯田の腕を押さえ込む。
普段の中島からは想像もつかない腕の力だ。
もみあううちに、鳴動が遠のいていく。
蛍光燈がきしむような音を立て、一斉に光をとりもどす。
飯田の体にまとわりついていたものも、いつの間にか消えてしまっていた。

「どこへ行ったんだ。なぜ姿を見せてくれない。悪魔よ、僕を見捨てる気か」

叫ぶと中島は再びキーボードに向かった。

―― KILL!! KILL!!

しかし、ホストコンピュータは無表情に磁気テープの回転を止めようとしている。

血走った目で、プログラムリストをにらみつけていた中島は、やがて精根（せいこん）つきはてたかのように、ふらりと立ち上がった。

「プログラムは完璧だ。バグ〔注8〕ひとつありっこない。なのにどうして悪魔は姿を現す前に消えてしまったんだ。すぐそこまで来ていたはずなのに」

プログラムリストをかかえた中島は、夢遊病者のような足取りで、CAIルームを出ていった。

ぼんやりとその光景をみつめていた飯田は、ようやく我に返ってコンピュータの電源を落とした。

「秀才ほど狂いやすいか。それにしても、人騒がせな地震だった」

飯田は記憶をふりはらおうとするかのように、つぶやきを声にした。

翌週、飯田はCAIルームで数学を教えていた。中島と高見沢京子のいるクラスだ。

降魔実験の失敗を目撃されたのが悔しいのか、中島は挑むような視線を投げかけてくる。

いままでの中島には考えられなかったことだ。

努めて彼を無視しながら、飯田は授業を進めていた。
「これから、ホストコンピュータと対話形式のテストを受けてもらう。テストと言っても直接成績には関係ない。コンピュータとの対話の中で、君たちに自分のウィークポイントを知ってもらいたいのだ。それじゃ私が合図したらパソコンにホストコマンドを入力しなさい」
生徒達が、一斉にキーボードをたたきはじめる。
誰一人としてディスプレイから目を離そうとしない。
「CAIの普及で、たしかに知識教育は楽になった」
ホストコンピュータには生徒達の回答状況が刻々と表示されている。
その様子をながめながら、飯田はくつろいだ気分を味わっていた。
「ヨッド、ヘー、ヴァウ、ヘー」
突然、地の底から響いて来るような、低いくぐもった声が、CAIルームをゆるがした。
ホストコンピュータの磁気テープが、すさまじい勢いで回転しはじめる。
パソコンのディスプレイも目まぐるしい変化を見せる。
無意味な色彩と図式が入り乱れる中に、ときおり文字らしいものも表示されてくる。
ヘブライ語だ。
生徒たちは声もあげず、魅入られたように画面を見つめている。
「中島だな。おい、いたずらにも限度があるぞ」
飯田の顔色が怒りで朱色に変わった。

中島の席に駆け寄ろうとした飯田は、次の瞬間床をなめていた。
一番前の席の生徒が足をかけたのだ。
はいつくばった飯田の背中に、二人の生徒が飛び乗り、腕をねじりあげる。
「こ、こんなことをして、ただですむと思っているのか」
飯田は事態を見極めようと、懸命に首をもちあげた。
それぞれの席から立ち上がって、彼を見下ろす生徒達の視線は夢遊病者のように、宙をさまよっている。
男子生徒が三人席を離れ、ふっと教室から出ていくのが見える。
他の生徒達が、じわじわと高見沢京子の周りをとりかこむ。
京子は一人正気のようだ。
血の気の失せた顔で、級友達が自分を取りかこむのを凝視している。
猫のような目には恐怖が宿っている。
上下の唇は細かく震えるばかりで、縫いとめられたように開かない。
度の強い眼鏡をかけた男子生徒が、京子の胸に触れた。
その瞬間、京子は呪縛（じゅばく）から解き放たれたように机の上に飛び上がった。
「なによ。気狂い！」
京子の指にカミソリが光る。
「よせ高見沢、逃げるんだ」

飯田の絞るような叫び声が反響する。
京子はねじふせられた無様な教師を一べつして、唾(つば)をはいた。
彼女は不良なりの、気の取り直し方を知っていた。
カミソリが弧を描き、男子生徒の眼鏡がふっとんだ。
頬が裂け、鮮血がほとばしる。
しかし、ひるむどころか、彼は機械のような正確さで、京子の右足首をつかみにかかる。
「えい、くそ」
カミソリの刃が数度こめかみを切り裂き、血まみれの腕に突きささったところでパシッと折れた。
別の生徒が不意をついて、京子の左足首をつかむ。
両足を持ちあげられて、京子は逆さ吊りになった。
スカートがまくれあがり、白い足がむき出しにされる。
京子と美人を競う加納深雪が、股間に顔をうずめるように、やにわに太股に嚙みついた。
たちまち深雪の口元からどす黒い血が流れ、下着を染めていく。
京子は苦痛にのけぞった。
しかし悲鳴はもはやあえぎでしかない。
深雪が両足を絡(から)めて、京子の喉(のど)をしめつけているのだ。
「やめろ。やめてくれ」

飯田の叫びは泣いていた。
「先生、もう遅い」
振り返った中島の表情には、悦楽（えつらく）があった。
「ぐぇ」
伸びきった両足が、二度三度激しくけいれんした。
深雪が口元の血をぬぐおうともせずに顔をあげる。
ぐにゃりと歪んだ京子の死体を残して、生徒の輪が崩れはじめた。

その時ドアが開いて、さっき教室を出ていった男子生徒たちが近藤をつれて戻ってきた。
三人は当惑気な、それでも威丈高な姿勢を保った近藤をＣＡＩルームの中央に招き寄せた。
「ウエッ」
近藤は嘔吐とともに、京子の死体を認めた。
生徒達が、じわじわと彼を取り囲む。
「てめえら、どういうことだ、これは」
近藤は半眼になって周囲に睨みをきかせながら腰を落として身構える。
うめきごえがした。
床にねじふせられたままの飯田の顔を、中島が土足で踏みつけていた。
「中島……？」

「近藤、逃げろ、みんな狂っている」
飯田が喉の奥で叫んだ。
突然、近藤が吠え声とともに床を蹴った。
だが、中島の顎を砕いたはずの足蹴りは空をきり、体は床に叩きつけられた。
数人の生徒が同時に彼に襲いかかっていた。
近藤は闇くもに正拳突きを放つ。
額を血に染め、あばらを砕かれ、それでも生徒達は無表情に近藤に迫り寄る。
「くっくっくっ」
中島の端正な口元が歪み、含み笑いが洩れる。
すでに幾人もの生徒が、近藤をがっしりと押さえこんでいた。
「処刑役は京子にして欲しかったろうが、ごらんのとおり彼女は一足先に死んでしまった。せめて深雪に頼んでやった分、感謝してくれよな」
顎に京子の血をこびりつかせたままの顔を、深雪が近藤に近づけた。
ふっとなま暖かい息が頬をなぜる。
深雪の手に光るナイフがわずかに赤くそまったかに見えた。
同時に近藤の喉元がぱっくり口を開けた。
ドクン。
せきをきったように大量の血が流れ出た。

近藤の目がカッと見開かれた。
ヒューというかすかな絶叫とともに、首がぐらりと後ろに折れた。
「さて、先生」
中島は数歩しりぞいてしゃがみこみ、はいつくばって飯田の顔をのぞきこんだ。
「いかがです、先生。ぼくの降魔実験は失敗じゃなかったでしょう。あの日悪魔は出現したんですよ。CAIのホストコンピュータの中にね。僕たちは、その出現に気づかなかっただけです。昨日の授業でCAIルームを使った時、ディスプレイに悪魔からのメッセージが表示されました。
――KILL! I UNDERSTOOD
と。当面、彼はコンピュータから抜け出すことができないので、集団催眠で生徒を操り、僕の願いを聞き届けてくれます。ところで先生、ぼくは悪魔に三人の魂を捧げる約束をしてしまいました。京子に近藤、そしてもう一人は……」
飯田は、自分に向かって足を引きずりながら歩いて来る生徒達の足音を、絶望的な気持ちで聞いていた。

〔注1〕**CAI**　コンピュータ・エイディド・インストラクションの略。コンピュータを教育目的に使用するシステムの総称。小説の中では1台の大型コンピュータ（ホストコンピュータ）が数10台の端末機（パソコン）を抱え、生徒は端末機を通して、ホストと対話形式で学習するシステム。

〔注2〕**LIST**　プログラムを表示するためのコマンド（命令）。

〔注3〕**サブルーチン**　プログラムの中で利用頻度の高い部分だけをメインルーチン（基本となるプログラム）から切り離し、独立したプログラムとしたもの。

〔注4〕**バッファ**　コンピュータの内部で一時的にデータを記憶しておく装置。データ処理の速度の差を補う目的で利用されることが多い。

〔注5〕**モデム**　コンピュータの情報を通信回線を使って送るための装置。通常はデジタル信号とアナログ信号の交換を行う装置をさす。脳波モデムは脳波とデジタル信号の変換を行う装置。これは作者の創作。

〔注6〕**RUN**　プログラムを実行するためのコマンド。

〔注7〕**RAM**　RANDOM　ACCESS　MEMORY　情報の入出力が自由にできるコンピュータの中の記憶装置。降魔術を悪魔が出現しやすい環境を設定し悪魔の降臨を待つ技術と定義づけた場合、コンピュータのRAMは悪魔が降臨するための容器と考えることができる。

〔注8〕**バグ**　プログラムやシステムの中の間違い箇所。バグを消すことをデバッグと呼ぶ。

第一章　魔の夜

六月の朝、久しぶりに太陽が顔を見せた。水たまりの泥水が、鏡のように光っている。白鷺弓子は少し目を細め、三階建ての校舎が、グラウンドから立ちのぼる水蒸気に、蜃気楼のように揺らぐのをぼんやりと眺めていた。

白鷺弓子。

すらりと小気味よく伸びた四肢は、名前の与えるイメージを裏切らない。

頭のよさを証明する、好奇心に満ちた鳶色の瞳と、よくとおった鼻すじは、美人の資格を十分に満たしている。が、茶目っ気のある可愛らしさの方が表に出ているのは、高校三年生としては、やや奥手の方なのかもしれない。

それにしても急な転校だった。

大手家電メーカーの札幌支店で部長を勤めていた父親の、本社栄転が決まったのが二カ月前。サラリーマン家庭につきものの転居には、すっかり慣れてしまっていたが、来春は大学受験という大切な時期でもある。

弓子自身、あと一年、最後の高校生活を慣れ親しんだ友達と一緒にすごしたいという気持ち

は捨て難かった。

それでも、さんざん迷ったあげく、一家そろっての転居に落ち着いたのは、

「お父さんも弓子も、まだまだとても一人じゃ危なっかしくて」

という母親の主張が通った結果である。

けれども、十聖高校に転校して二日目、弓子はもう、安易に母親に妥協したことを後悔しはじめていた。

「好きじゃないな、こういうムード」

編入試験での弓子の成績は、十聖高校の選抜クラスでもトップクラスを維持できる実力を示していた。

両親は、これで受験も一安心と喜んでくれている。しかし、この学校にはどこか不自然な、いいようのない冷たさが感じられた。

札幌の高校もそれなりに名の通った受験校だったのだが、選抜クラス・一般クラスといった類（たぐい）の差別もなかったし、なにより生徒の一人一人が、もっと自由にのびのびと高校生活を楽しんでいた。

それに比べて、十聖高校の生徒達を見ていると、老人めいた一種の諦（あきら）めすら感じられる。

選抜クラスの生徒は機械のように正確に、受験向きに組み上げられたカリキュラムをこなしていくだけ。

一般クラスの生徒ときたら、制服を背広に着替えれば、できの悪い大人の見本市のようなも

のだ。
誰もが自分の役割分担を知っていて、その殻から抜け出そうとしない。
そういえば、昨日一日、自己紹介のあいさつをのぞけば、一度も声を出さなかった。
もともと「無口な方ではない」弓子にしてみれば、それだけでも耐え難かったはずだ。
敵意を抱かれたような様子があるわけではない。
クラス全体が妙に寡黙で、目に見えない何者かに圧迫されているかのようにぎこちない。
休み時間にも、弓子に声をかけてくる級友は誰一人いなかった。
「最初からあんまりもてすぎて、女の子に睨まれちゃ困るわ」
冗談にしろ、そういって母親を笑わせていた弓子のプライドはいたく傷つけられていた。
校庭にチャイムが鳴り響く。
弓子は気をとり直すように、大きく息を吸うと、おもむろに校舎に向かって歩き出した。

「駿河なる、宇津の山べのうつつにも、夢にも人に逢はぬなりけり」
古文の小原教諭が抑揚のない声で短歌を読みあげている。
職業柄、目立つ化粧は控えているのだろうが、全体に大づくりで、それでいて同性の目から見ても魅力的な顔立ちとスタイルは、モデルだといっても十分通用するだろう。
しかし、授業内容はおせじにも魅力的とは言いがたい。
弓子はさっきから欠伸をかみ殺すのに必死だった。

「この短歌はK大で過去三回、W大でも二回出題されていますから……」

『これじゃ、伊勢物語のロマンもだいなしね。在原業平がかわいそう』

いよいよ睡魔に屈するかという瀬戸際になって、弓子は背後で、プラスチック板を叩くようなリズミカルな音がしているのに気づいた。

そっと首をめぐらすと、右斜め後ろの席に座った端整な顔立ちの男子生徒が、机の上にハンドヘルドコンピュータ〔注1〕を乗せて、しきりにキーを叩いてる。

たしか中島朱実とかいう名前だったように思う。周囲の席の生徒達は、昨日ひとわたり名前を紹介されていたのだが、ほとんどごっちゃになってしまって覚えていない。

その中で中島だけは、教師の紹介に頭を下げた弓子にも知らぬふり。

横顔と名前が女の子ぽかったので、印象に残っていた。

『わりと堂々と内職してるわね』

弓子はこの級友に少し親近感を覚えた。

『ゲームってわけでもなさそうだし、自分でプログラムを作れるのかしら』

一息入れたらしく、中島が背筋をのばして、心もち顔を上げた。

切れ長な目がこちらを向いて、偶然弓子と視線がぴたりと合った。

降魔実験の成功は、中島の人間性を根底から変えてしまったように見えた。

それとも、封じこめられていた本来の魔性が甦り、かりそめの中島を侵蝕しつくしたのだ

ろうか。

二カ月前には気弱さの象徴でしかなかった美しい容貌が、オーラを伴った強烈な自我を発散している。

だが、はじめて中島と視線を交えた弓子を驚かせたのは、そのまぶしいまでの存在感ばかりではなかった。

デジャ＝ヴュ、既視感現象。

『昨日は気づかなかったけど、この人にどこかで会ったことがあるような気がする。随分昔のことのようにも思えるし。いやだ、どうしてなの？』

畏怖(いふ)に似た感情の奔流(ほんりゅう)が、弓子の体をかけぬけていた。

中島は、じっと自分を見つめている弓子に興味を示した様子もなく、再び単調な音をたててキーを叩きはじめている。

深い谷間を覗(のぞ)きこんだときのような喪失感が、弓子をとらえていた。

「白鷺さん、どっちを向いてるの？」

多少の苛立(いらだ)ちを込めた小原の声が、弓子を現実に引き戻した。

黒板では白チョークで書かれた短歌が、赤や黄の注釈で寸断されている。

「この短歌のうつつは、何をさしているのか、説明してごらんなさい」

弓子は、級友達のためすような視線が、一斉に自分に向けられているのを感じた。

中島がキーボードを叩く音だけが、相変わらず単調に、けれども何の遠慮もなく響いている。

「はい、地名の宇津と、現実という意味のうつつをかけた言葉です……」
声が少し上ずっている。
小原の質問自体は、文学部の史学科を志望している弓子にとって、何の苦もない内容だったのだが。
「よく勉強してるわね、白鷺さん。でも、先生の話も、ときには参考になるはずよ」
皮肉混じりの釘のさし方のわりには、小原の表情はなごんでいた。
束の間の緊張がとけて、小原の微笑に引きこまれるかのように、男子生徒達が笑いをもらした。
弓子は、なんだか、クラス全員にバカにされているような気がしてきた。
授業終了のチャイムが鳴る。
「先生、ちょっと」
教室を出ようとした女教師を誰かが呼び止めた。
中島だ。
振り向いた小原の目には、明らかな動揺があった。
『先生が中島君を恐れている？』
中島は自分の席から立ち上がろうともせずに、指先でハンドヘルドコンピュータのキーをもてあそんでいる。
「先生、今夜は予定どおり、おいで頂けますね」

透明な、よく通る声だ。

小原の顔が上気したように見えた。

「わかったわ。CAIルームね……」

大きな塊りを飲み込んだかのような、かすれた声だった。

口元を半分だけゆるませて頷くと、中島は軽く手をふった。

ぽかんと二人を眺めていた弓子は、中島の動作はまるで犬に「もういいからあっちへ行け」と指示しているかのような印象を与えた。級友達は、あたりまえのような顔つきで、次の授業に備えている。

ただその誰もが、精一杯の努力によって、辛うじてあたりまえの顔つきを保っているのだということを、弓子は見抜いていた。

弓子の好奇心が騒いだ。

意を決して、弓子は中島の机の正面に立った。

「ねえ、中島君……」


何を言えばいいのか、自分でもよく判らない。

気ばかり焦っていた。

中島が怪訝そうに顔をあげる。

魔性を秘めた目が、今度は真正面から弓子をとらえた。

弓子の既視感はさらに強まっていた。



『私、あなたにどこかで、会ったことがあるような気がするの。どうしてかしら？』
ただこれでは、聞かれた中島の方も困ってしまうだろう。
どう説明すればいいのか、弓子は未知の感情の処理に戸惑っていた。
「君ねえ」
中島が、子供を揶揄するように目を細めて、口を開いた。
「僕には、あまりかかわらない方がいいと思うんだけど」
冷ややかな声だった。
「違うんです。私……」
叫んでしまってから、弓子は次の言葉を用意してなかったことを思い出した。
後ろの席で、いかつい体格の男子生徒が表情と手つきで、もうやめておけという意味の合図を送っている。
チャイムの音とともにざわめきがすっと引き、二時限目の物理の教師がいつの間にか教壇に立っていた。
『無視するならするでもかまわないわ。知りたいのは私の勝手なんだから』
席に戻った弓子は、細く、形のいい前歯で下唇をかみしめた。
午後七時、弓子は校舎の陰にひそんでＣＡＩルームの様子をうかがっていた。
生温かい風に混じって、羽虫がうるさくまとわりついてくる。

雲の切れ間から、時折満月が顔を出し、平家建ての別棟になったＣＡＩルームの全容を薄暗がりの中に浮かび上がらせる。
『高三にもなって探偵ごっこなんてバカみたい』
静まりかえったＣＡＩルームを見張りながら、弓子は内心苦笑した。
なぜ、こんなことをしているのだろう。
自問するまでもない。
中島はあのとき、たしかに「今夜」と言っていた。
夜のＣＡＩルームに小原を呼び出して、いったい何をしようというのか。
しかも小原は、それが何なのかを、明らかに知っていた。
弓子は教室を出ていくときの、小原の酔ったような足取りを思い起こしていた。
それにしても、中島が女教師と何をしようが、弓子の知ったことではないはずだ。
『一目ぼれ？』
あまりに短絡的な答えだ。
『まさかね』
中島が独特の魅力を備えていることは認めざるをえない。
けれども弓子は、自分が、中島に好きとか嫌いとかとは違った別の次元で強く引かれているのだと信じ込もうと努力していた。
渡り廊下を人影がよぎったように見えた。

知らない間に、時計はもう九時近くを示している。

弓子は緊張に体をこわばらせた。

やがてＣＡＩルームに灯(あか)りがともり、数人が部屋の中を動き回っている様子が、一瞬、窓ガラスに浮かんだ。

が、弓子が心を躍らせるひまもなく、大柄な男の影が窓に近寄ったかと思うと、あっという間にすべてのブラインドが降ろされてしまった。

弓子は校舎の裏にまわってみることにした。

小原は不安げにあたりを見回すと、ノブに手をかけた。

ＣＡＩルームには煌々(こうこう)と灯りがついていた。

三人の生徒が彼女を中に招き入れる。

黒い貫頭衣(かんとうい)に身を包み、一人は銀の皿(さら)をうやうやしく捧げ持ち、他の二人は剣と燭台をそれぞれ手にしていた。

「やあ、いらっしゃい」

ひとり中央に座り、印(いん)を結んでいた中島がおもむろに立ち上がった。

小原の表情がわずかになごむ。

昼間、パソコンが設置されていた机はあらかた取り払われ、かわって中央には、皮張りのソファが一脚。

背もたれ、膝、足のあたる部分には体を結(ゆ)えるためのベルトが取りつけられているのが、電気椅子を連想させて不気味である。

「さっそくはじめましょう」

中島の目は異様な光を帯びつつあった。

ソファを中心に、床にはホロスコープのように十二等分された円が描かれている。

〈⊙・☽・♉・♂〉

円内には四カ所、このような赤黒い拳(こぶし)大の模様があった。

「よし、電気を消して燭台に火を灯(とも)せ」

中島の指示に、三人の生徒は盲目的に従っている。

背後の闇に気圧(けお)されたかのように、小原は中島の前にひざまずいた。

中島の白く透明な手が、小原の上気した頬に触れる。

「さあ、もっと気分を楽にしてください。あとほんの数分のうちに、悪魔ロキが降臨します。ロキは奸智(かんち)と美しさで知られた悪魔、まさに先生にふさわしい……」

小原の耳に、中島の声は重厚な響きに変じていた。

中島の手が、ゆっくりと頬からうなじへと伝わっていく。

「では、そろそろホストコンピュータを稼働させましょう。心配はいりません。先生ならきっと悪魔も満足してくれるはずです」

目を閉じて震えている小原を離れ、中島は端末機にコマンドを与えた。

硬質ガラスの向こうで、磁気テープがゆっくりと回り始める。
次いで中島は、ハンドヘルドコンピュータを手にとった。
キーボードを指が走る。
まもなく液晶ディスプレイから白いもやが現れ、次第に膨れあがりながらドアの外に消えていった。
低い、内臓を揺さぶるような獣の咆哮(ほうこう)が渡り廊下に響きわたる。
電子獣ケルベロス。中島が魔界から呼び出し実体化させた、今宵(こよい)の儀式の警護役である。三人の生徒が小原をソファへと導いた。
「さあ、呼吸を整えてください。精神を集中して、アティルト界の悪魔を呼びよせるのです」
カシャカシャ。
小原の手足と、緊張に弾性の増した胸が、ベルトで結えられる。
せかすように、端末機のディスクドライブが音を立てる。
「月と火星が対局(オポジット)に、太陽と冥王星が対局(オポジット)に、天宮にはグランドクロスが一つ。悪魔の降臨に、これ以上の夜はない」
マシンルームからヘルメットのようなものを取り出すと、中島はそれを小原の頭にかぶせた。
脳波モデムヘル。人間の脳波をデジタル信号に変え、直接コンピュータとの対話を可能にするためのインターフェースである。
後頭部から伸びた赤と黒の二本のケーブル。赤い方をホストに、黒いケーブルは端末のパソ

コンに接続する。
中島が仕上げにコマンドを走らせた瞬間、磁気テープが猛然と回転を早めた。
すでに意識がホスト内の何者かと交錯しはじめたのか、小原は体を小刻みに震わせている。
麝香に似た刺激臭が、どこからともなく漂ってきて、その体にまとわりつく。
焦点の合わない目で儀式を見守っていた三人の生徒に、畏怖の表情が浮かんだ。
「ヨッド・ヘー・ヴァウ・ヘー」
マシンルームから、低いくぐもった声が聞こえてきた。
「イァー」
小原が絶叫を放ち、体を反りかえらせた。
宙を見すえる目は、恐怖に見開かれている。
断続的な、ふりしぼるような叫びが続く。
四肢をよじる小原に、ソファの足が床から浮き上がり、ケーブルがうねる。
締めつけられた手首から滲み出た鮮血がベルトを染める。
だが、やがて恐慌状態は去った。
表情が徐々にやわらぎ、小原は目を閉じた。かみ切った唇からはまだ新しい血が流れ出ているものの、その口元には微笑さえ浮かんでいる。
「小原を取りこむことに成功したな、ロキ。これからどう扱うつもりか」
中島は、モデムヘルに接続されたパソコンのディスプレイを覗きこんだ。

脳波モデムを通じデジタル化された小原の感覚・思考は、ホストコンピュータの中でロキの作りだしたイメージ世界へと誘われる。
先ほどの小原の苦しみは、デジタル化された神経系が悪魔の神経系にふれて引き起こされた、一種の拒否反応といえるだろう。
ディスプレイは小原の視神経がとらえた心象世界を映しだす。
そのとき、突然、ドアの外の渡り廊下の方向からケルベロスの咆哮が轟(とどろ)いた。
剣を捧げ持ったいかつい体の生徒が、中島の目くばせに応えてドアに向かった。

小原がＣＡＩルームに入ってしばらくたったころ、弓子は校舎の裏手から渡り廊下に回り込んでいた。
リノリウムに反射する月明かりを頼りに、そろそろと歩を進める。
照明の消えた窓のブラインドの隙間(すきま)から、かすかな灯りがゆらいでいるのは、蠟燭(ろうそく)でもつけているのだろうか。
『よすのよ、こんなこと。早く家へ帰ってシャワーでも浴びれば、みんな忘れてしまえるわ』
いつもの自分が、切迫した声で耳に訴える。
だが、今夜は体の中に別の自分がいた。
『何を怖がっているの。中島君の正体を見届けるチャンスじゃないの』
弓子は、同年代の女の子なら誰もがそうしたように、別の声に従った。

ＣＡＩルームから何か聞こえてくる。すすり泣きのような、遠い叫び声のような。
弓子は用心深く、しのび足の歩調をゆるめた。
心臓が胸からはみ出しそうに鼓動を高める。
そのとき、何の予告もなく、突然目の前の闇から何者かがのっそりと這い出てきた。
雲を抜け出た月が、徐々にその輪郭をあらわにする。
体の半分ほどもある肉食獣の口。鋭く反りかえった二重に生えた牙。
電子獣ケルベロスである。
炎のような目が弓子を睨んだ。耳の脇からはえた金属性の触角が、ぴくぴくと動悸を打っている。
獣は今やその全身を月の光にさらしていた。
胴体には虎の縞が、重量感のある尾には蛇の鱗があった。
立ちすくんだ弓子に生臭い息を吐きかけると、獣はゆっくりと顎をあげた。
牙の背後から、炎のような双眼が弓子を探っている。
突然、獣が咆哮した。強烈な、腹わたをえぐるようなうねりが弓子を襲い、飲み込んでいった。薄れゆく意識の中で、弓子はＣＡＩルームのドアが開いて黒い人影が飛び出してきたのを、ぼんやりと認めていた。
異様な熱気と間近に聞こえる断続的な喘ぎ声が、弓子の意識を呼び戻した。

片側の頬だけがひんやりと感じられるのは、どうやら自分が床に寝そべっているかららしい。

あたりが妙に薄暗い。

『そうだ、渡り廊下のところで化け物に襲われたんだわ』

はっとして身を起こした弓子の視界に、いきなり皮椅子に縛りつけられた小原の体がとびこんできた。

頭に妙なヘルメットをかぶせられ、荒い息に喘ぎ声が混じっている。

不意に何者かが弓子の右肩を押さえつけた。

「高井君……？」

たしかにそこには、高井と紹介された級友の顔があった。

だが、弓子は声を飲み込んだ。

眼鏡の奥の高井の目が空ろで、何も見ていないのに気づいたからである。

『それに、何よ、この格好は』

すでに弓子は、貫頭衣をまとった生徒が二人、高井と同じような夢遊状態でつっ立っていることに気づいていた。

幸いなことに、あの化け物は見当たらないようだ。

それともあれは、悪夢にすぎなかったのか。

「アアッ、アァー」

喘ぎ声がひときわ高まった。

その声のもたらした戦慄が、むしろ弓子を冷静にした。

『これがCAIルームの中?……』

蠟燭の火。

床に描かれた奇妙な模様。

そして、ひとり冷ややかな笑みを浮かべている、中島朱実の不気味なまでに端整な顔。

激しく体をくねらせ、喘ぎ続ける小原教諭。

弓子は、やにわに立ち上がろうとした。

が、高井のがっしりとした腕が、弓子の肩を外そうとはしない。

「なんなの、これ。先生に何をしたの」

はじめて叫びが口をついて出た。

中島がゆっくりと片手をあげ、高井を制した。

いかつい腕がぎこちなく動いて、弓子の肩を離れていった。

「白鷺弓子……だったよな。こっちへ来てみろよ。面白いものが見れるから」

立ち上がろうとして、弓子はスカートの裾が一カ所、犬にでも嚙(か)みつかれたように破れているのをみつけた。

『やっぱりあの化け物は、本当にいたんだわ』

中島は、小原のヘルメットから伸びた、ケーブルのつながったパソコンのディスプレイを弓子に示した。

ディスプレイには、ギリシャ彫刻のような、ブロンズの凜(りん)とした青年の像が映し出されていた。

いや、彫刻ではありえない。

神々(こうごう)しいばかりに美しいその映像は、まるで生命を吹き込まれているかのように、ゆるやかにうごめいていた。

青年の顔から胸にかけてがクローズアップされる。

その表情は人間の到達しえない叡智(えいち)を秘め、漆黒(しっこく)の瞳は見つめるものすべてを飲みこむブラックホールを連想させた。

「悪魔ロキだよ」

耳もとで中島の声がした。

「コンピュータ・グラフィックスとかいうんでしょ？　これ」

弓子の目は、ディスプレイに釘づけにされたままである。

「想像力でこんなリアルな悪魔が描ければ、立派なものさ。本物の悪魔なんだよ。まあ、信じられないのが当然だろうけど」

ディスプレイがロキの逞(たくま)しい胸をあらわにする。

黒々と輝くその胸は、びっしりと鱗(うろこ)におおわれていた。

ふと弓子は、小原の喘ぎ声がロキの動きにぴたりと周期を合わせていることに気づいた。

次の瞬間、その意味を悟った弓子は、はっと息をのんだ。

「そのとおり。小原先生はロキとお楽しみの真っ最中なのさ。イメージの世界の中でね」

中島は、なぜか吐き棄(す)てるように言った。

今や小原は絶頂を迎えつつあった。

はだけたブラウスから、汗に光る胸が脈打つのが見える。

女体のすべてが、見えない悪魔を受け入れていた。

そのとき弓子は、小原の胸のあたりにうっすらと青いもやを認めた。

見る間にもやは濃度を増し、同時にいたたまれない腐臭が鼻をついた。

振り向くと、中島の顔に明らかな狼狽(ろうばい)があった。

ハンドヘルドコンピュータを片手に駆け寄ると、小原の前にしゃがみこみ、キーを叩きながら、片手で棒状のセンサーをあちこち振り回している。

絶叫とともに小原ははてた。

青いもやも、女体に残された余韻(よいん)に呼応するかのように、次第に薄れていく。

中島はふっとため息をもらした。

その表情に、弓子は強固な自信の揺らぎを感じとっていた。

「僕はコンピュータを使って悪魔を呼び出すことに成功した。そんなに驚くほどのことじゃない。魔術は本来、非常に緻密(ちみつ)な論理構造をもった科学なんだ。ただ、何万種類ものデータを組みあわせてシミュレートする必要のある降魔実験は、一人の人間が一生かかっても試しきれな

いほど複雑なものだった。だから、これまでは何代にもわたって秘密の研究を続けてきたり、奇跡的な偶然に恵まれた、ごく限られた連中しか悪魔とコンタクトをとることができなかった。だけど、人間ならほとんどお手あげの膨大なシミュレーションも、コンピュータにはたいした重荷にならない。僕は、魔界から悪魔を降臨させるプログラムを完成させた」

中島の口調は、独りごとであるかのように淡々としていた。

いつの間にかCAIルームはすっかり片づけられ、ついさきほどまで禍々しい儀式が演じられていたのと同じ場所とは、とても信じられない。

失神したままの小原をかつぎ出していった高井達も、そのまま姿を見せず、放心したように突っ立っている弓子と中島だけが、煌々とした照明のもとに顔をつき合わせていた。

学生服に戻った中島の素顔は、思いがけないほどに十七歳の高校生だった。

その横顔を見ていると、あれほど信じ難く異常な体験をした後でも、弓子は頭から中島の話を信じる気にはなれなかった。

「プログラムは完璧だった。魔界に棲む者達の中でも、君を驚かせたケルベロスみたいな獣なら、ハンドヘルドコンピュータでも十分呼び出し、実体化させることができる。だが、より高次な魔物ほど多くのデータ処理が必要になる。ロキのような大悪魔ともなると、ここのホストコンピュータの能力をフルに発揮させても、コンピュータ内にデジタル化した状態で降臨させるのが精一杯。それでも僕にとっちゃ、ロキを呼びだせたことは大きかった。ロキはコンピュータのディスプレイを通して、人間を一種の催眠状態におくことができる。もうこの高校に、

僕にさからえる奴は一人もいない。一般クラスの馬鹿どもも、教師連中も、誰もが僕を心の底から尊敬している。くすぐったいぐらいにね。僕の支払う対価は、ロキに生け贄を捧げることだけだ。それだって、今見たとおり、イメージ世界のできごとにすぎない……」

中島は宙に向かって話していた。

弓子という聞き手がいることすら、もう念頭から消えてしまっている。

だが、中島の脳髄は、言葉と裏腹に、同じ疑問を反芻していた。

『まさか、そんなことが』

中島は魔術師ではない。

もし彼が魔術師であったら、悪魔を呼び出したときに、目的と期間を明示した契約をかわすことがいかに大切か知らぬはずがない。

だが、現に中島はそれを怠った。

ロキが近藤達を血まみれの肉塊に変えたとき、中島は自分が支配者になったかのような錯覚にとらわれていた。

ロキの力は絶大だった。

生徒も教師も、潜在意識の底に中島に対する尊敬の念を植えつけられたようだった。

男は従い、女は中島に媚を売った。

これまで何らの力をも所有したことのない高校生にとって、それは究極の悦楽にも思えたほ

どである。
ロキは生け贄に女を要求する。
ロキに捧げられた女は、喘ぎ、身をよじり、やがて絶頂に達する。
中島の心に、女体を自在に蹂躙（じゅうりん）する加虐（かぎゃく）的な喜びが潜んでいたことは否めない。
ただ中島は、それをイメージ世界のできごととして割り切って考えていた。
ロキはコンピュータから抜け出せない。
ロキを形成する膨大（ぼうだい）なデータは、世界最大規模のコンピュータでも使わない限り、分析処理はできないはずだ。
ロキは中島の開発したソフトウェアのもとでのみ行動が可能になる。
だが、それは本当にたしかなことなのか。
あの、小原にまとわりついた青いもやの正体は、いったい何だったのか……。
「何かを怖れているのね……」
女の声がした。
中島は自分が弓子に語りかけていたことを思い出した。
『俺としたことが、何をよけいなおしゃべりをしているんだ』
視線を定め、中島は弓子を正面に見た。
弓子の目が輝いていた。
その瞳が不意に朱色に変じた。

一瞬の後、中島は幻想世界に拉致されていた。

草一本生えぬ赤茶けた岩肌は、雲を突き破り、天に向かって屹立している。

空は薄墨を流したように重くよどみ、生温かい風が谷間を吹き抜けていた。

険峻たる岩肌に両脇をはさまれ、うねうねとどこまでも続く小道。

その青年は、くいしばった歯の間から、火のような息を吐き出しながら、小道をかけていた。

裾のほころびた麻の貫頭衣。

胸にまでとどく長い髪。

神話の世界にでも迷いこんだのだろうか。

だが、かいま見える青年の端整な顔は、まぎれもなく中島のそれに違いなかった。

頬の土ぼこりを、汗がまだらにぬぐい去る。

青年はそれをぬぐう余裕もないようだった。

「わが君、なぜ私を見捨てて行かれるのですか、イザナギ、なぜ……」

やるせない思いをこめた哀しい声が、青年の耳にとどいた。

思わず彼の足が鈍る。首がひとりでに振り向こうとする。

だが、青年は強く唇をかみしめると、まっすぐに行手をにらみ、再び駆けだした。

青年を追う女は、石片に傷つけられた血だらけの足を引きずるように駆けていた。

白く伸びた優美な腕が、少しでも青年との距離をつめようとするかのように、せつなげに前

に突き出される。
　黒髪が風になびき、物狂おしい声とともに後方に流れる。
　髪の下から現れた顔は腐敗のため溶けただれ、眼窩がむき出しになっていた。
　骨と肉の間でうごめく蛆。
　女が喘ぐと、涙のような肉汁が頬からこぼれ落ちる。
　唇がとけ、むき出しになった白く細い歯が、悔しげに噛み合わされた。
　と、紫電一閃、青年の前の岩が裂け、中から何者かが現われた。
　緑の皮膚に蛙の容貌をした女。
　女は青年の行く手をはばむかのように両手を広げた。
「黄泉醜女！」
「ト・ド・マ・リ・ナ・サ・イ」
　緑色の短い首に、喉仏が不自然に膨れあがった。
　青年は髪の中から櫛をぬくと、その赤く塗られた歯をへし折り、女に投げつけた。
　そのうちの一本が、女のむき出しの胸に突き刺さる。
「ギャアァ――」
　絶叫が谷を揺るがし、醜悪な肉体が岩肌に血しぶきをあげた。
　大小無数の岩が、小道めがけて降りそそぐ。
　黄泉醜女の屍の脇を駆けぬけた青年の耳に、再び鈴を振るような哀しい声が届いた。



「お待ちください、イザナギ……」

「中島君……？」

顔をあげると、怪訝そうに自分を覗きこむ弓子の瞳があった。

おびえたような、それでいて哀れみをたたえた瞳であった。

「いいから、もう行けよ」

とりつくろうように、素っ気ない言葉が口をついて出た。

弓子はおとなしく従った。

中島はその足音がドアのむこうに消えるまで身じろぎもせずにいた。

「あのもやの正体をつきとめなくては」

気をとりなおしたように呟くと、中島はモデム電話をセットし、ＩＳＧのホストコンピュータを呼びだした。

―― HELLO NAKAJIMA
WHAT'S TODAY?

人工知能クラフトからのメッセージを確認すると、中島はディスクドライブを切りかえ、もう一台の改造されたパソコンを稼働させた。五万の魔術用語データベースを持った、自動翻訳装置。

中島の労作のひとつである。

——正体不明の気体が、生け贄の上に発生した。今からその形状、質量予測値を転送する。分析してみてくれ。

ハンドヘルドコンピュータに収められたデータは、電話回線を通じてマサチューセッツに電送される。

一分……二分、中島は苛立たしげに机を指ではじいた。

自動翻訳装置を間にはさむと、送信速度が落ちるのは致し方のないところだ。

五分後、ようやくクラフトが分析結果を電送してきた。

——体積あたりの重量は、通常のエクトプラズムの五倍。出現状況から判断して、気体がロキのものである確率は高いでしょう。

——ぼくはロキを実体化させるようなデータ処理はしていないぞ！　第一CAI用コンピュータで、ロキ実体化のための膨大なシミュレーションがこなせるはずはあるまい。

——現在与えられたデータから明確な回答を提示することはできません。ただ、コンピュータに降臨した悪魔は優れた知性を有する一種の人工知能です。自ら実体化の方法を発見したという可能性を否定することもできません。

——THANK YOU CRAFT

エンディングメッセージを送ると回線が途切れた。

『こんなはずはない。だがいずれにせよ。ロキを僕の手中におさめておくためには、新しい技術開発に取り組む必要がありそうだな』

中島は空を睨みつけた。

〔注1〕**ハンドヘルドコンピュータ**　携帯用のコンピュータのこと。電池で動き屋外で使用できるものもある。中島が所有しているのはこのタイプ。

第二章　転移

丸の内四丁目、午前〇時。

照明の消えたビルが黒々とそびえている。

銀杏並木には歩く人影もない。

街路灯に呼びよせられた蛾が、鱗粉の弧を描く。

その、時折りコツンと鉄柱にぶつかる音が耳につくほどに、オフィス街は静まり返っていた。

ただ、そうした静寂も、経済の牽引役を自負する大手商社には無縁のことらしい。

現に三ツ根物産ビルの十二階には、まだ灯りが煌々とついている。

欧州向けの交易を担当する輸出第三部。

ＥＣの輸入規制本格化が確実視されている八月まで、あとわずか二週間。

かけこみ輸出の最後のチャンスとばかりに、同部の商社マン達は、このところずっと二十四時間のフル稼働を強いられていた。

さすがにこの時間ともなると疲れが出るのか、ソファにひっくり返って仮眠をとる者、東京駅の近くにまでラーメンの屋台を求めてくり出す者と、さまざまである。

井上は充血した目を細めながら、海外の輸出拠点を結ぶオンライン・システムのワークステーションに向かって、翌日の出荷予定をインプットしていた。
日頃の自称ダンディも、メタルフレーム眼鏡のレンズをふけと指紋でまだらにしていたのでは、かたなしである。
キーボードに人差し指を乱暴に弾ませながら、片手で無精髭をしごきあげる。
「あとどのくらい残ってる？」
仮眠をとっていた橋口が、ソファから半身を起こして声をかけた。
欠伸まじりのけだるい声だ。
「あとはフランス向けの家電製品だけだから、そんなにはかからないよ」
井上はコード表のビニールシートを扇子がわりに、ワイシャツをはだけた胸に風を送りこむ。
「出荷の伸びはどの程度になった？」
橋口がようやく起き上がってきた。
腫れぼったい目をこすりながら、井上の肩ごしに画面を覗きこむ。
「対前年比二〇〇%は確実にいっちゃうだろうね。むこうの税関で差し止めをくらうんじゃないかと思うと、気が気じゃないよ」
「多少の摩擦はしようがないさ。どうせ二週間後には前年比九割減でご愁傷さまってことになるんだから」
「だけど遅いな、課長達。ラーメン食うのにいつまでかかってんだ。ついでに一杯やってんじ

ゃないの」
「まあ休めよ。入力作業、交代するからさ」
人のよさそうな微笑を浮かべると、橋口は井上の肩に手をかけた。
「じゃ、悪いけど頼むか」
立ち上がった井上が大きく伸びをしたとき、モデム電話が鳴った。
国内支店からのデータ転送を表示するＬＥＤランプが点滅している。
「何だろう、今ごろ」
と橋口。
「どうせ余った物(ブツ)でも回せってんだろ。今輸出で手いっぱいで、こっちはそれどころじゃないんだ」
すでに休憩態勢に入った井上は、とりあう様子もない。
「まあまあ、支店の連中もこんな時間まで頑張ってるんだから」
なだめながら橋口はディスクドライブを切りかえ、コンピュータを着信状態にセットした。
数字の羅列(られつ)が消え、画面がグリーンにそまる。通常なら、ここで送信者のセクションを示すＩＤ番号が表示されてくるはずである。
ところがどうしたことか、ディスプレイはさまざまに色を変えながら、意味不明な図形を表示しはじめた。
「何なんだよ、これ？」

時折り画面を文字がよぎるが、もちろんそれがヘブライ語だと、二人は知るよしもない。

やがてディスプレイは、男の立像を映し出した。

「夜の夜中に、ヒマな冗談はよしてくれって言いたいんだよな」

井上は面白くもなさそうに画面を横目で睨みながら、煙草に火をつける。

その怠惰な香りが、いつの間にかオフィスに流れはじめた麝香の刺激臭をおおいかくす。

ただ、悪戯にしても、この謎の男の立像はなかなかよくできたコンピュータグラフィックである。

ギリシャ彫刻のような均整のとれた体。長く黒い髪。鮮明なバラ色の唇。そして漆黒の瞳には、はかり難い魔性が秘められている。

「どうでもいいけど、これは相当なレベルのＣＧなんじゃない？」

と橋口。

消し忘れた煙草がフィルターを焦がしているのか、きな臭い煙が漂う。

「おっ、悪い悪い」

井上が煙草を消すのに気をとられている間に、ディスプレイに描かれた男が口元に笑みを浮かべた。

薄く開かれた唇から尖鋭な牙がのぞく。

橋口はその男の微笑が気に入った。

今や、男の存在感がディスプレイを通じて橋口をとらえていた。

そのうちに、橋口はディスプレイの表面が妙にしめっぽく、湿気を帯びていることに気づいた。

手の甲で画面をぬぐおうとした橋口は、指先にねっとりとからみつくものを感じて、一瞬たじろいだ。

ぬめぬめとした感触が、慌(あわ)てて引っこめようとした手にまとわりつき、重量感を伴った巨大な水滴のように、そのまましゃっと床に投げ出される。

「うわっ、なんだ、これ！」

橋口の叫びに、ようやく井上は異常な事態を知った。

顔面を蒼白にした橋口の目は、床に転がった不気味なゼリー状の物質を見つめている。

それは緩慢にうごめいていた。

ピンクの原形質の表皮の下には、網の目状に緑色の血管が巣くっていた。

生体からえぐりとった臓器のように、その未知の塊(かたま)りは動悸(どうき)を打っていた。

おぞましい。それ以外に形容しようのない塊り。

ズルッ。

音をたててそれが動いた。

それは意志を持って二人に近寄ろうとするかに見えた。

肉質の異臭が鼻をつく。

「ウエエッ」

井上が悲鳴とも嘔吐ともつかない声をあげる。
「逃げよう」
橋口が後ずさりしながら、身じろぎもできずにいる井上をドアの方に押しやろうとする。
だが、すでに異物は二人の足もとに、間近に迫っていた。
そのゼリー状の表皮から、不意に、赤い水飴のように粘性を帯びた触手が伸びたかと思うと、井上の膝にからみついた。
「早く、早く離れるんだ」
橋口は叫び声をあげながら、机の上に掌をすべらせ、触れるものを手あたりしだいに異物めがけて投げつける。
ゼリー状の表皮は、そのすべてを体内にとりこんでしまう。
ドクッ、ドクッ。
橋口には、その音が自分の胸の鼓動なのか、それとも耳が異物の動悸を伝えているのか、もはや定かでなかった。
橋口の見開かれた両眼に、異物の素早い動きが見えた。
次の瞬間、橋口の右足はピンクのゼリーに包まれていた。
橋口は声をあげようとした。
が、恐怖が橋口の喉をしめ上げていた。
異物は貪欲に、着実に、橋口の肉体をむさぼりはじめていた。

なすすべもなく、橋口はとり込まれていった。
苦痛はなかった。
何ものかの内臓に、全身の皮膚が直接包み込まれているかのようだった。
橋口の手が、最後のよりどころを求めて空をきった。
グシャアーッ。
血しぶきが四散する。
脈打つ異物から、橋口の頭蓋(ずがい)のみが突出している。
空を睨んだ眼窩(がんか)から、緑色の触手がどろりと流れ出た。
井上は、橋口の凄惨(せいさん)な死にざまが現実のものとは思えなかった。
足にまとわりつく赤い触手に、手にしたボールペンを突き立てる行為を、機械のようにただくり返していた。
井上の理性は、目の前の光景を拒絶していた。
異物が井上を見つめた。
いつの間にか、それは目を持っていた。
邪悪で、執拗(しつよう)な呪縛(じゅばく)に満ちた目。
その目が井上を凝視(ぎょうし)していた。
触手が足から胴へとはいのぼる。
唐突に井上は笑い出した。

触手から緑色の液体が流れ出ると、あたりに硫酸が生肉を溶かすような臭いが充満した。肉体を溶解させながら、井上は哄笑していた。
「何だあいつら」
「ロリコンのゲームでもやってんじゃないの」
通路では、外から戻った同僚達が、ときならぬ井上の笑い声に顔を見合わせていた。

そのころ、十聖高校のCAIルームでは、モデム電話の接続されたホストコンピュータに向かい、中島が悪魔ロキとの対話を試みていた。
――どうだ？　移動実験はうまくいったのか？
――YES
くぐもった声が、スピーカーを通じて中島の臓腑を揺るがした。
――ようやく僕の技術を認めざるをえなくなったようだな。
――お前がそう考えたいのなら、思い込むのを止めはしない。ただ、完璧にはほど遠い状態だとだけはいっておこう。
――それは仕方がない。大量のデータを一時に送り込めば、多少のデータ損傷が生じるのはやむをえない。
音声入力装置を握りしめる中島の額に脂汗が光った。
緊張に全身を硬直させながらも、少なくとも表面上は淡々と対話を続ける中島の心の片隅に、

拭いきれない一抹の不安があった。

このままロキが自らを実体化する力を持ったとしたら、いったいどうなるのか？

いや、そんなことがあるはずはない。

この時点で中島は、ロキが実体化能力を持っていることにまだ気づいてはいなかった。

『現にロキはこうして、僕の提示した悪魔移動理論に服従しているではないか』

悪魔移動理論。

ロキに限らず、すべての悪魔にとって、地球上を自在に移動できる能力を備えることは積年の夢であった。

太古より、この地球上で悪魔が出現できる空間は極めて限定されており、しかもいったん降臨した悪魔は、出現地点から半径数キロ内でしかその実体を保つことができなかった。

だからこそ、これまで人間界は、強大な悪魔に侵略されることもなく存続してきたのだといってよい。

そうした魔界の常識を一変させるような、革命的な技術を中島はあみだしていた。

呼び出した悪魔をデジタル信号化させ、通信回線によってあちこちのコンピュータに送りつけるという手法である。

この技術が完成すれば、悪魔は移動に関する物理的制約から解放されることになる。

そして今夜、ロキは実験の成功を身をもって体験したはずなのである。

もし、この時中島が、三ツ根物産の惨劇をまのあたりにしていたとしたら、おそらく彼は手

近なコンピュータ機器のすべてを破壊しつくしていただろう。
悪魔自身が実体化の能力を持つ。
それは想像を絶する恐ろしい事態を意味していた。
移動実験の成功により、降臨地点の制約をとかれた悪魔が自らの意志で実体化しはじめたとしたら……。
打消そうとするほど、不安は高まっていった。
『ロキに対抗できるような、強力な悪魔を魔界から呼び寄せる必要があるかもしれない』
――献納せよ。
突然、スピーカーが唸り声をあげた。
――シラサギユミコを献納せよ。
『シラサギ、白鷺弓子?』
中島はその名をとなえるように反芻した。
ロキが弓子を生け贄に求めている。
――だめだ、それは許せない。
ひとりでに叫びが口をついて出ていた。
中島自身、自らの反応に驚いていた。
――誰に命令しているつもりなのだ、小僧。
ロキの声には明白な怒りがあった。

——待て、わかった。
中島の唇は震えていた。
弓子のあどけなさを残した表情が、目の前に浮かんで消えた。
中島は再び、幻視世界へと導かれていた。

屹立する岩肌も、蒼然とした暗雲も、青年の目には入らない。
しかつめらしく細められた目は、ただひたすらに小道の行く末を見定めていた。
土色に乾ききった唇には、赤黒く凝固した血に砂がこびりついている。
鋭い岩の剝片が突き刺さった足は、紫色に腫れあがっている。
だが、後方から迫るか細い喘ぎが、傷ついた足の運びをさらに早めた。
「イザナギ、なぜ待ってくれないのです。私がこんなに醜くなってしまったからですか？　黄泉の国に入るときあなたは誓ったではありませんか。私がどんな姿になっていようと連れ戻すと。あれは偽りだったのですか。私なら、あなたがどんな姿になっても、逃げたりはしない」
恐怖と罪の意識を払いのけようとするかのように、青年は歯をくいしばっていた。
青年は飛ぶように駆けた。
だが、女の執念は徐々に二人の距離を縮めつつあった。
追う女の瞼の腐れ落ちた目から流れる涙が、嗚咽とともに髪を伝って落ちる。
「イザナギ……」

叫ぶたびに頬の肉が裂け、白い歯がむき出しになる。
やがて小道が途切れ、蒼茫たる湿原が青年の眼前に広がった。
「トヨアシハラ」
傷ついた唇が安堵にうち震えた。
腕をいっぱいに広げ、水蒸気を吸いこむと、青年は唇を強く引き結び、振り返った。
迫りつつある女の無残な白い姿を凝視する青年の目には、哀れみが浮かんでいた。
谷の出口に座すると、青年は瞼を閉じ念を凝らした。
体中から吹き出た汗が、身についた砂ぼこりをまだらに流していく。
くいしばった歯がギリギリときしみ、頬の筋肉が収縮する。
青年の整った顔は生色を失い、歪んで見えた。
石を投げれば届く距離まで女が近づいたとき、青年の体がかすかに宙に浮遊した。
念動力!
轟音とともに、切り立った崖の中腹から、大小無数の岩が落下をはじめる。
たまらず女は立ち止まった。
その眼前に二抱えほどもある大岩が落ち、道を塞いだ。
「許せ、イザナミ」
瞼を閉じ、立ち上がると、よろける足取りで青年は湿原へと足を進めた。
背丈をしのぐ葦の葉を両頬に感じながら、青年は女のふり絞るような遠い叫びを聞いた。

「必ずあなたのもとに参ります。幾百、幾千年かかろうと」

声は途切れ、嗚咽が青年の心を鞭うった。

「許せ、許してくれ……」

中島が悄然(しょうぜん)とした足どりでＣＡＩルームを去って数分後、待ちわびていたかのように黒い人影が渡り廊下を滑(すべ)り抜けた。

暗闇の中に伸びた手が端末機の電源スイッチを探りあて、ディスプレイの蛍光(けいこう)がキーボードに走る指を照らし出す。

白くなめらかな指である。

その指が、威圧するような押えた声にぴくりと動きを止めた。

――オバラ。

声は、たしかにそう呼びかけた。

――中島の作った移動用プログラムをリストアップする。おまえにそれが操作できるか。

――できると思います。操作だけならば。

――十分だ。これ以上の技術革新など不要だ。自在な移動と実体化さえわがものになれば、私一人でアッシャー界を支配することもできる。

――御意のままに。

音声入力装置が、上気した呟(つぶや)きをとらえていた。



第二章

憑依（ひょうい）

あっけないほど平穏に数週間が過ぎていった。
十聖高校の選抜クラスは、相変わらず弓子にとって、さして居心地のよい場所とはいえなかったが、それでも幾人かは気軽に言葉を交わせる友人もできた。
『私の方もどうかしてたんだわ』
弓子は禍々しい記憶を、努めて頭から拭い去ろうとしていた。
だいたい、中島が呼びだしたとか言っていた悪魔なるものも、弓子が目にしたのは、単なるコンピュータグラフィックにすぎなかった。
あの暗闇で弓子を脅えさせた妖獣も、ただの大きな犬に、恐怖がおどろおどろしい妄想を付加したものと考えた方が自然だろう。
ほんの一瞬だったにせよ、悪魔の存在を信じてしまうなど、われながら馬鹿げた話である。
『きっと魔術サークルか何かなんだろうけど、ちょっと異常だったわね』
弓子は自分にそう言い聞かせていた。
教師の小原までもが参加していたのが、多少妙といえば妙な気もするが、他人の趣味嗜好に

あえて口をはさむこともない。

それはそれとして、中島がこの高校内である種の力を保有しているのはたしかなようだ。

最近はCAIルームに閉じこもりっきりで、滅多に授業に顔を出さない。

他のクラスがCAIルームを使うときだけ、ぶらりと現れては、授業も聞かず、ハンドヘルドコンピュータでプログラミングに精を出す。

だれもそれに文句をつけないのは、どう考えても不自然である。

だが、親しくなった級友達も、なぜか中島の話になると口をつぐみ、すぐに話題をそらしてしまう。

といって、別に嫌な顔をするわけではない。その強烈な存在感を語るのに、今さらどんな言葉を選べばよいのかといった一抹の畏怖を交えた当惑なのである。

『まあ、いいわ。どうせ、私には直接関係ないことだし……』

弓子は頭ではそう割り切りながらも、中島の怜悧な横顔を思い浮かべるたびに、胸の鼓動が高まるのを押えきれなかった。

夏休みも近い七月の朝。

国立駅から一橋大学に向かって南に伸びる大通りは、弓子の通学路でもある。

眩しすぎる日射しに精一杯枝を伸ばし、淡い緑の葉を広げる銀杏並木の下を、弓子は眠そうな目を下に向け、何かを考えながら歩いていた。

昨夜の電話が弓子の心を重くしていた。
「中山さんって方からよ」
電話をとった母親が、夕食の後片づけを手伝っていた弓子を呼んだ。
「もうボーイフレンドができたの？」
「中山……？」
そんな苗字の級友がいたかしら、と首をかしげたとき、ふと閃くものがあった。
「ああ、きっと学校の連絡網ね」
とっさに弓子は嘘をついていた。
心臓の鼓動が高まる。
母に動揺を悟られまいと、弓子は少し間を置いて、おもむろに受話器をとりあげた。
「はい、弓子ですが」
「………」
受話器の向こうから、かすかな息づかいが聞こえてくる。
「もしもし……」
「明日から学校を休むんだ」
突然、押し殺したような声が、弓子の耳元で囁いた。
「もしもし、誰なの……」

「君は狙われているんだ。しばらく休んだ方がいい」
台所で、母親が不審気に洗いものの手を休めて、こちらを見ているのが目に入る。
「そのことなら、明日学校でゆっくりうかがいます」
弓子は平静さを装った口調で言い切った。
一瞬間を置いて、舌打ちする音とともに電話は切れていた。
「何だったの？」
母親が心配そうに問いかける。
「どうってことないわ。あんまりもてすぎるのも困ったものね」
一応は、わけのわからない返事でごまかしておいたのだが。

ブルージーンズにTシャツの大学生達が、夏休みの計画を声高に話しながら弓子を追い抜いていく。
その中の一人が左手にさげていたギターケースが、弓子の腕に触れた。
「あっ、ごめん」
いぶかしげに顔をあげた弓子に、大学生ははにかんだような微笑を送る。
だが、弓子は他人ごとのように、ぼんやりとその視線を受け流す。
『あれは本当に中島君だったのかしら』
弓子は内心の確信に、あえて問いを投げかけていた。

無理に押し殺してはいたが、あれはやはり中島の声だった。

だが、中島は弓子に何を伝えたかったのか。

電話の声は真剣だった。

何ものかに追われているかのような、せっぱつまったところがあった。

中島に何が起こったのか。

おかげで、昨夜はほとんど一睡もできなかった。

普段は欠かしたことのない予習も、中途半端なままおっぽり出してしまっていた。

参考書に目を通そうとしても、活字の合間に妙に懐しさを呼び起こす透徹したまなざしが浮かんでくるように思えて、中身が一向に頭に入ってこなかった。

喧噪が傍らを駆け抜けていった。

早朝練習を終えた野球部員達である。

すでに弓子は無意識のうちに大通りを左に折れ、校門をくぐっていた。

そのとき弓子は、不意に襲いかかった耐え難い悪寒に体をこわばらせた。

何に驚いたのか自分でもよく判らない。

だが、職員室の窓からこちらをうかがう小原を認めた瞬間、弓子の顔から血の気が引いた。

小原の目は、限りなく深く、暗黒だった。

悪魔のような漆黒の瞳がじっと自分を見つめている。

その目に吸いよせられるように、ふらふらと歩きはじめた弓子の肩を、自転車に乗った男子

生徒が軽くトンと叩いていった。
「危ないよ、ぼんやりしてちゃ」
声はすぐに遠ざかっていった。
もうすぐ始業時間である。
校舎に向かって駆けていく生徒達が、呆けたような弓子の表情を怪訝そうに振り返っていく。
ごくあたりまえのいつもと同じ朝の風景である。
弓子は今一度、職員室の窓を見やったが、すでにそこには小原の姿は見当たらない。
『なにを脅えてるのよ、弓子。あなたらしくもないわ』
自分に言い聞かせでもするかのように、弓子はしゃにむに駆けだした。
始業のチャイムが校庭に響きわたった。

小原教諭は悠然と教室に入ってきた。いつもと変わりのない笑顔が、クラスを見まわした。
『どうもこの先生とは相性が悪いのよね、私』
半ばほっとしながら、まだ肩で息をついている弓子の耳に、小原が生徒達にCAIルームに移るよう指示している声が聞こえる。
『古典の授業でCAI？　何をするつもりなのかしら』
これまでのところ、十聖高校のCAIシステムは、理数系の科目と英語のみにもっぱら利用されていたはずである。

古典にＣＡＩをどう活かそうというのか。
怪訝そうな弓子にはおかまいなしに、級友達はさっさと本を閉じると、筆記用具も持たずに席を立ちはじめる。
弓子はさりげなく首をめぐらしてみたが、やはり中島の姿は見当たらない。
『君は狙われているんだ。しばらく休んだ方がいい』
唐突に、昨夜の電話の声が弓子の耳の奥に反響した。
こめかみから吹きだした汗が、冷ややかに首筋を伝っていった。
弓子の顔から血の気が引いた。
「ねえ、どうかしたの？」
束の間ぼやけた視界の中に、見なれた顔があった。
比較的気のおけないつきあいの加納深雪である。
深雪の黒い大きな瞳が、いたずらっぽく光っていた。
「弓子、サボリは許さないわよ」
「よしてよ。私、本当に気分が……」
「さ、行きましょ」
深雪は妙にはしゃいだ様子で弓子の腕をとると、引きずるように彼女を立ち上がらせた。
何を思ったか、小原が二人に近づいてきた。
「白鷺さん、ちょっと顔色が悪いんじゃない？　保健室で休んできたら」

必要以上の優しさを込めた声である。
『これが本当の猫撫で声ね』
「大丈夫よ、先生。私がついているもの！」
大げさな身ぶりで、深雪が弓子の肩をたたいてみせた。
他の生徒達は皆、そ知らぬ振りで教室を出てゆく。
だが、弓子はそれら一連の動きに、言い知れない不自然さを感じとっていた。
『いつもの級友(みんな)じゃない！』
背筋を戦慄(せんりつ)が走った。
弓子の腕をつかんでいた深雪の手に力がこもった。
「大丈夫よ、深雪。もうちゃんと歩けるから」
言葉とは裏腹に、弓子の声は震えていた。
教室のドアを出たところで、男子生徒の人垣が弓子をとり囲んだ。
「さあ、行こう」
弓子を促す高井の目が、空を泳いでいた。
いつの間にか、弓子は級友の群れの中心にいた。
相変わらず深雪は弓子の腕をしっかりとつかんでいる。
深雪の華奢(きゃしゃ)な体つきからは想像もつかない、恐ろしいほどの力が、その手にこめられていた。
「お願い、離して」

叫ぼうとした口に、ハンカチがねじこまれた。
一人身をもがく弓子を中央に、生徒達は整然とした足どりで渡り廊下へと進む。
ＣＡＩルームに生徒達を招き入れると、小原は後ろ手にすばやくドアを閉めた。
カチッ。内側から鍵をかける音を合図にしたかのように、生徒達が動きを止める。
ようやく弓子は深雪の腕から解放された。
教室の中を見回した弓子の喉から笛のような叫びがもれた。
『あの夜と同じだわ』
教室の中には机も椅子もなく、教壇のあるべき場所におかれた皮椅子に、中島が深々と腰をかけている。
その目には、かすかな憐憫が浮かんでいるように見えた。
『中島君、どうして……』
弓子の唇がもの問いたげに動いた。
中島は弓子の視線を真正面から受け止めていた。
ゆっくりと立ち上がった中島は、皮椅子の横に立って大仰にそれを手で示した。
「今日は、ここが君の指定席だ」
口に含んだような呟きが、弓子の心臓を貫いた。
弓子の脳裏に、あの夜の悪夢が生々しく甦る。

「嘘よ、こんなの！」
弓子は両膝を床についていた。
リノリウムの細かな傷が、弓子に、目の前にくり広げられている状況が紛れもない現実であることを告げていた。
その傷の紋様がぼやけたかと思うと、床にぽつりと熱い水滴が落ちた。
『泣いちゃだめよ、弓子。しっかりしなきゃ』
黒いエナメルのハイヒールが、弓子の落とした涙を踏みにじり、動きを止めた。
床に手をついたままおずおずと首をあげた弓子を、小原の不気味な微笑が見下ろしていた。
「何も心配することはないわ。さあ立って」
弓子の眼前に、小原の妖艶な手がさし出された。
「いやっ、いやよ……」
弓子は激しく頭を振った。
『中島君、お願い』
救いを求めるように、弓子は小原の脚にさえぎられた視線で中島の目を追った。
「仕方がないんだ、もう遅すぎる」
自分に言い聞かせるような中島の口調を、弓子は絶望的な気持ちで耳にしていた。
今や中島の細められた目は、硬質ガラスの向こう、磁気テープの回転をはじめたホストコンピュータに向けられていた。

テープの回転にあわせるように、正面に据えられたディスプレイが、極彩色に色をかえる。
「よし、生け贄の準備だ」
命令を下す中島の声に、すでに迷いはなかった。
弓子の目に、数人の生徒が自分をつれにやってくるのが見えた。
が、次の瞬間、突然の地響きが彼らの動きを止めた。
――待て!
はらわたをえぐるような、揺らぎを伴った声がそう叫んだ。
――なぜ止めるんだ、ロキ。
予期せぬ事態に中島は冷静さを失っていた。
音声入力装置を握りしめる手に、冷や汗がわき出ている。
――もう、お前たちの手は借りぬ。
――なんだと……?
部屋の中に緊張が走った。
――わからぬか、中島。私はすでに自分の力でアッシャー界に出現できるのだ。
驚愕に見開かれた中島の目の前で、ディスプレイの表面に青いもやが浮かびはじめた。
魔界と人間界を結ぶ次元の裂け目が、今まさにそこに現れようとしていた。
オーロラのような極彩色の光を帯びて、空間が異様な曲線を描き、その深淵から刺激臭を伴った冷気が吹きだしていた。

弓子はポカンと口を開いていた。あまりにも極端な日常との乖離が恐怖心を麻痺させたのだろう。

ただ呆然と、青いもやの吹き出すあたりを見つめていた。

やがて徐々に密度を増した青いもやは、ホログラフのようにぼんやりと形を整えはじめた。

それはゆっくりと実体化していった。

冷気に舞っていた光の束が流れるような黒髪に変じ、秀美な顔の輪郭がブロンズの皮膚を得て、その漆黒の瞳で生徒達を見据えていた。

「ヨッド・ヘー・ヴァウ・ヘー」

ブロンズの唇が動き、くぐもった呪文が漏れた。

いつの間にかひざまずいていた小原が、敬虔な面持ちで手を合わせ、同じ呪文を唱和している。

その唇はすでに血の色に染まり、醜く歪んでいた。

『ロキが小原をここまで取り込んでいたとは……』

なすすべもなく、その場にひれ伏している生徒達を、中島はやり場のない怒りを込めた目で見つめていた。

『いつかこうなることはわかっていた。今の自分には、ロキと戦う力も、白鷺を救う力もありはしない。だが、せめてあいつの弱点だけはつかんでおかなくては……』

何とか気をとり直して自分を奮い立たせると、中島はパソコンに接続したセンサーを、もう

ほとんど実体化を完了しつつあるロキに向けた。
モデム電話でＩＳＧのホストコンピュータを呼びだす。
『今のうちにコントロールしておかないと、大変なことになる』
センサーがとらえる悪魔の形状を人工知能クラフトに電送しながら、中島はロキとの訣別の日が来たことを悟っていた。
恐怖に立ちすくむ弓子に目を向けると、ロキはゆっくりと両手を差し出した。
その裸形は、ブロンズの深みを帯びて、ギリシャ神話のアポロンを思わせる美しさである。心を読みとるべくもない漆黒の瞳が、弓子を金縛りにしていた。
「こちらへ来い」
深く憂いを含んだ透明な声が、弓子に語りかけた。
弓子は最後の救いを求めるかのように中島を見やったが、ディスプレイを見つめる中島の表情は異様に冷めていた。
弓子が動こうとしないのに業をにやしたのか、ロキはかっと口を開いた。
鮮血の朱が、ロキの怜悧な容貌を一瞬のうちに邪悪に染めた。
と、ブロンズの腕が不意にシューッと音を立てて溶解しはじめたかと思うと、ロキの両腕はピンクの原形質からなる、ぶよぶよとしたゼリーの塊りに姿を変えていた。
手の先から幾本もの鞭が伸び、粘性を帯びて弓子の四肢にからみついた。
『いや、こんなのっていやよ！』



弓子の叫びは声にならない。

ロキは唇を薄い朱色の舌でなめ回していた。弓子の両手をとらえた触手が、軽々と身体を宙に持ち上げる。

弓子の目に、ロキの黒い鱗におおわれた胸が間近に見えた。

新たな触手が、セーラー服の上から弓子の身体をまさぐっていた。

触手から滲(にじ)み出る粘液が弓子の服を溶かし、白い煙をあげる。

あらわにされた肌にぬめぬめとした粘液が光る。

『急げ、クラフト』

必死でキーを叩き続ける中島は、その背に向けられた弓子の、もはや哀願に近い視線を痛いほどに感じていた。

コンピュータルームの硬質ガラスに、宙吊りにされ、四肢を反りかえらせている半裸の弓子の姿が映っている。

執拗(しつよう)にその華奢(きゃしゃ)な身体をまさぐり続ける悪魔の触手は、それ自体が命を持つものであるかのようにドクンドクンと脈を打ち、弓子の肌の白さを透かした生々しいピンク色に輝いていた。

――転送されたデータによると、ゼリー状の物質は水分五八％、エクトプラズム一七％、他は地球外物質につき、成分分析不可能。

人工知能からのメッセージがディスプレイに表示される。

――類似例の報告はあるか。

――イエス。類似した物質は今世紀になってマヤの神殿、ニューハンプシャー等において発見されています。

――あの物質に弱点はないのか。

――事例が不足しているため、仮説立案不可能。ただし、マヤの神殿のレリーフ下で発見された物質は、調査隊が所有していた硫化水銀の塗料を浴び、蒸発してしまったと報告にあります。

『硫化水銀？』

中島の目がギラリと光った。

不意に喘ぎ声が中島の思考を中断した。

振り向いた中島の目は、胸をはだけ、自ら乳房を抱きしめながら、ロキの足元で身もだえしている小原の姿をとらえていた。

中島は小原の乳房の下に、拳ほどの大きさにてらてらと光る部分があるのを見逃さなかった。目をこらしてみると、薄く鱗が生えかけているのがわかる。

中島は鱗の形状データをクラフトに転送した。

――女に何が起こったんだ？

――女は悪魔の子を身籠(みご)もったのでしょう。鱗と妊娠の相関関係は十七世紀に実証されています。

『そんな馬鹿なことが。小原がロキと交わったのは、あくまでも想像の世界でのことだったはず……』

上気した小原の喘ぎに応えるかのように、ロキの下半身が変化を見せはじめた。

ブロンズの皮膚がピンクに染まり、徐々に粘性を帯びた輝きを得ていった。

「アアッ」

小原は歓喜の声を上げると、服を脱ぎ棄て、全裸となってロキの下肢に絡みついた。

今やゼリー状の塊りと化した悪魔の下半身が、女の肉体を飲みこんでいく。

輝きを増したピンクの原形質に包まれた小原の顔は、悦楽の絶頂に歪んでいた。

二人の女を得て、ロキは興奮していた。

弓子の身体をまさぐる触手の動きが、一段と激しさを増した。

すでに弓子の皮膚はすべての感覚を閉ざしてしまったかのようだった。

四肢は力を失い、首ががくりとうなだれていた。

涙にかすんだ目に、異物に凌辱されるがままの自分の肉体が映っていた。

太く熱を帯びた触手が、弓子の口腔をねじ開いた。

ゴボッ。

押し上げられた弓子の顎に、鮮血が溢れ出た。

『中島君、あなたは……』

遠のこうとする意識の中に、突如として、これまでにない強烈な既視感覚が弓子を襲った。

『何か、何かがわかりかけている……』

ロキが触手を縮めて、弓子の身体を引き寄せはじめた。

頭部を残し、ロキの全身は無数の触手を蠢かせる不気味な円柱状の肉塊と化していた。

ピンクの原形質には、いつの間にか網のように緑色の血管がはりめぐらされ、ゆっくりと動悸を打っていた。

弓子の白く、細い両足が、ずぶずぶと原形質にのめり込んでいく。

やがて悪魔は、弓子の胸のあたりまでを自らの体内にとり込んでしまった。

そのとき突然、原形質の中から二本の腕が突き出されたかと思うと、その両手が弓子の首をとらえた。

たちまち手に力がこもり、首をしめあげる。

グッ。

弓子の口から新たな血がほとばしった。

異物にとり込まれた身体が苦悶によじれていた。

「やめろ、やめないか！」

中島の叫びは悲鳴に近かった。

弓子の首をしめつけている両腕の向こうに、ゼリー質の中で哄笑している小原の顔があった。

その笑いには、明らかに炎のような嫉妬がこめられていた。

弓子の身体の緊張が、糸が切れたかのようにぷつりと途切れた。

見開かれた目にはもはや生気はなく、白い膜がかかっていた。
「ヨル、ルラアー」
異界の声をあげると、悪魔は触手をもたげて、弓子をドサリと床に投げ出した。
弓子の亡骸から目をそらそうとするかのように、クラフトのメッセージを表示したなりのディスプレイを見つめる中島の心の中を、後悔の嵐が荒れ狂っていた。
『なぜ、もっと真剣に忠告しなかったのか』
あんな中途半端な電話ではなく、すべてを打ちあけていれば、弓子をこんな目にあわせることもなかったはずだ。
『白鷺を殺したのは僕だ……』
まさかロキが自ら実体化する能力を会得していようとは予期できなかった。
それは本当である。
だが、現にこうして悪魔は邪悪な肉体をアッシャー界に実在させ、何の罪もない弓子を殺してしまった。
そしてそれを自分は、なすすべもなく傍観していたのだ。
思わず唇を嚙みしめた中島は、視野の片隅に淡い朱色を認めて顔をあげた。
悪魔の触手は、CAIルームを原形質の樹林に変え、脈打ち、うねりながら、催眠状態にある生徒達の四肢をとらえつつあった。
触手に巻かれた生徒は呆けたような異質の笑みを浮かべ、抵抗もなくロキの体内に取りこま

れていく。
ギシッギシッ。
骨の砕ける音が、低く継続的に耳を襲った。
ゼリー状の原形質から、骨と肉片のケイオスと化した生徒の死骸が吐き出される。
それはどす黒く床に広がり、異臭を放っていた。
中島の注意を呼び起こした朱色の光は、その地獄絵の向こうにあった。
教室の出入口近くの空間に、うっすらと朱色のオーロラが浮かんでいた。
『時空の歪み、まさかロキとは別の悪魔が……？』
だが、中島は次の瞬間、より切実な驚きに思念を奪われていた。
ぬめぬめとした触手が、中島の腕に絡みついていた。
「ロキ、この僕になにをする！」
数本の触手が、さらに中島の両足にまとわりついてきた。
ロキが、あざわらうような声をあげた。
――この女は十分にコンピュータを操作できる。すでに自分の力でアッシャー界に出現できる私にとって、お前の力は無用どころか、小うるさいばかりなのだ。
ロキの体内に、小原の顔が笑っている。
中島はとっさに、ハンドヘルドコンピュータを手にしていた。
触手が中島の身体を天井近くまで吊り上げた。

空を泳ぎながら、中島は必死でケルベロスを呼び出すコマンドを入力していた。
電子獣に大悪魔ロキが倒せるとは思えないが、他に何ができるというのか。
液晶ディスプレイから白い霧が立ちのぼった。
「行け、ケルベロス」
叫びに応えるかのように、霧は急速に膨れあがると、実体化を待つのももどかしげに、ロキめがけて襲いかかる。
ケルベロスの怪異な姿が顕わになったとき、その牙には噛みちぎられたゼリー状の肉片が付着していた。
――魔界の獣にして、人間に味方するか！
牙をむいた口腔から炎のような息を吐き出し、ロキは地を揺るがす唸り声をあげた。
シュルシュルと音をたてて襲いかかる触手を巧みに避けながら、魔獣はそのつけ根近くに牙をむく。
ロキの緑色の血がしたたり落ち、床のリノリウムを溶解する。
二体の悪魔が発する雷鳴のような咆哮に、さしもの硬質ガラスにも亀裂が走る。
ロキは魔獣と激しく戦いながらも、中島を放そうとはしない。
「ケルベロス、こっちだ」
中島の叫びに宙をとんだケルベロスの胴を、ついに触手がとらえた。
鱗を持った重量感のある尾が、一瞬動きを止めた。

が、たちまちその先端が二股に裂けたかと思うと、かま首をもたげた蛇のように牙をむき、胴に絡んだ触手を噛みちぎる。
ロキが大きくうめき声をあげた。
触手から逃げたケルベロスの目が中島を追う。
魔獣に一瞬の隙が生じた。
ロキは触手をしならせると、魔獣めがけて中島の体を投げつける。
鋭い牙に額を叩きつけられて床に倒れた中島に、再び触手が絡みつく。
額から流れる鮮血に、視界が真紅に染まっている。
中島の目には、猛り狂うケルベロスの姿が、次第に幻想の彼方にかすんでいくように見えた。
『魔術師のとんだ最期さ』
中島の脳裏に、ふと不思議な幻視の記憶がよみがえった。
あれはいったいなんだったのだろう。
女はたしか、自分にそっくりの青年のことをイザナギと呼んでいた。
日本神話のイザナギ・イザナミ伝説が、僕に何らかの関係があるとでもいうのか。
……だが、今さらそれが分かったところで何になる。
もはや中島の両目は、観念したかのように静かに閉じられていた。
ロキに責めたてられ、悲鳴と化したケルベロスの叫びが遠くに聞こえる。

ちょうどそのころ、一度は完全に動きを止めていたはずの弓子の心臓が、トクットクッとかすかな律動をはじめていた。

——弓子、弓子。

親しい声が自分を呼ぶのが聞こえる。

——だれなの？　お母さん？

優しい声だった。

弓子が覚醒したのを知ってか、その声はいったん途切れた。

『私はまだ生きている？』

——立ちなさい、弓子。

声が今度は直接弓子の心に話しかけてきた。

恐る恐るうす目を開けた弓子は、空(くう)に浮かんだ朱色のオーロラから、その声が伝わってくることに気づいていた。

身を起こすと、オーロラの奥にまるで蜃気楼(しんきろう)を見るような田園風景が浮かんでいる。

だが、声の主の姿はそこには見当たらなかった。

実りきらぬ稲穂をなびかせる青々とした水田。夏草におおわれた丘陵。そして不思議な存在感をもち、無造作にころがる巨石群。

『あれは飛鳥の石舞台じゃないかしら』

——イザナミ、前世であなたはそう呼ばれていました。



再び、声が弓子の心に語りかける。
『前世の私？　神話世界のイザナミですって？』
あまりにも唐突すぎる話である。
だが弓子は、声が真実のみを告げているのだと、本能的に察知していた。
――立ちなさい、弓子。この空域は私の眠る飛鳥へと続いています。中島、いえ、あなたの大切なイザナギを連れて私のもとへ来るのです。
ぎこちなく立ち上がり後ろを振り返った弓子の眼前に、惨劇の全容があからさまにされた。
弓子は息を飲んで、再びその場にへたりこんでしまった。
これまで耳が聞こえなくなっていたのか、その瞬間、ふいに魔物のすさまじく咆哮しあう響きが弓子を現実世界に引きずり戻した。
――遅かったのですね。私の来るのは。
弓子は心の中で、声の主がため息をついたように思った。
かつては生徒達だった肉片に隠れるように、触手に絡みつかれるままに身を委ねている中島の姿が見える。
その両目はすでに閉じられていた。
――つかの間、あなたの体に乗り移り、私の力を授けましょう。念をこめて見つめれば、すべてのものを焼きつくせる力を。でも、あなたの体がそれに耐えられるかどうか……。
次元の裂け目に強烈な閃光がひらめいたとき、弓子は体の中に今まで感じたことのない清冽（せいれつ）

な力がみなぎってくるのを感じていた。

「イアアア……」

これまで耳にしたことのない異様な叫びが、中島の目を再び見開かせた。

『何が起きたんだ？』

見上げると、青い煙を吹きあげて燃えさかる触手が、中島の頭上でうねっていた。

中島は驚愕を押し殺しながら身を起こした。

何十本もの触手が波のように空間をのたうちまわり、火の粉をまきちらしている。

原形質の肉塊を従えたロキのブロンズの顔が、怒りのためか赤黒く変色している。

その体のあちこちに次々と火柱がたち、そのたびに屍の焼ける臭いが鼻をつく。

青い煙が教室中に渦巻いていた。

中島は死んだはずの弓子がむっくりと起き上がり、凝然と朱の瞳でロキを睨みつけるのを、信じられない面持ちで見つめていた。

『白鷺は無事だったのか』

弓子の視線の向けられた場所から、次々に火の玉が湧き上がる。

魔術師の間で自動発火と呼ばれる超能力である。

火に責めたてられたロキは、小原を自分の体内から引きぬくと、瞼をとじて呪文を唱えはじめた。

ピンク色の原形質が見る間に凝縮し、青銅の皮膚におおわれていく。
漆黒の瞳が弓子を正面から見すえたとき、すでにそこには美しいブロンズの裸身があった。
弓子はなおも必死で念を放つ。
カシッ、カシッ。
青銅の皮膚に飛び散る火花に、ロキの口元が不気味な笑みに歪んだ。
『もうだめ！』
弓子は思わず顔を手でおおった。
が、心の中の声が圧倒的な力で弓子の心から恐怖をぬぐいとった。
——恐れてはいけない。早く、中島を連れて逃げるのです。
呆けたように立ちつくす中島にかけより、弓子はその手をとった。
『暖かい手だ』
中島は長い間忘れていた、母親さえも与えてくれなかったぬくもりを感じたように思った。
「中島君、逃げましょう」
苦しげに細められた目は、教室の出入口近くの朱(あか)いオーロラに向けられている。
中島はその意図するところを悟ると、すばやく室内を見回した。
戦いに敗れ、死んだように横たわるケルベロスを、すばやい操作でハンドヘルドコンピュータに呼び戻したとき、冷徹な表情で二人に向かってロキが一歩を踏み出していた。
「待て」

立ちすくむ弓子。
だが、いきなり目の前が赤くそまったかと思うと、弓子の唇は彼女自身思いもかけぬ言葉を発していた。
──下がれ、悪魔。
つかの間、弓子の体を支配したイザナミは、体中の念を手刀にこめ、気を放った。
「イェー」
ロキの体の中、一カ所だけゼリーの肉質がむき出しになった眉間に火柱がたつ。
のけぞったロキが猛禽(もうきん)のような悲鳴をあげたとき、二人はオーロラに向かって翔(と)んだ。
オーロラのひだが風に流されるようにふくれあがり、二人の体を包みこむ直前、盲滅法振り回されたロキの腕の爪(つめ)が弓子の背中を縦に切り裂いた。
ほとばしる鮮血。
だが、オーロラは急速にうすれ、二人の姿もかき消えていた。
オーロラのあった場所に、糸のような鮮血が一筋、復讐を誓うロキの禍々(まがまが)しい声に揺れ、空を流れていた。

第四章

道行（みちゆき）

昨夜来、飛鳥地方には霧雨が降り続いていた。茂り合う杉の古木が陽光をさえぎり、昼なお暗い飛鳥綾樫山。

天平のはるか昔より山腹にたたずむ、猿に似た石像が、顔の半分ほどもある大きな目を宙に向けていた。

石像の前に落ちる雨が、かすかに朱をおびはじめ、風もないのにゆらゆらと揺れて見える。やがて、苔むした幹と幹の間にうっすらとオーロラがうかびはじめた。

大和の人々があやかしと呼び、山の名の由来ともなった奇現象である。

伝承によれば、あやかしの中に入れば、人必ず神隠しにあうという。

オーロラはしだいに密度を増し、ほの暗い山中にときならぬ光の宴を催した。

と、突然湧き起こった疾風が雨足を乱し、オーロラを揺らめかせた。

二つの人影が宙にうかぶ。

一瞬の後、影は実像と化し、下草の中に落ちた。

やがて、現れたときと同じように、オーローラは次第に光量を減じ、消失した。

その跡を、何ごともなかったかのように霧雨が透過する。
日本神話の神々は綾樫山のオーロラをコントロールすることによって、自在に人間を移動させることができたと伝えられる。
イザナミは二人をロキの毒牙（どくが）から救うために、その力を利用したのであろう。

木々の清浄ないぶきと、冷たい霧雨を頬に感じ、中島は瞼（まぶた）をあげた。
視界の隅に、しだの葉に埋もれて横たわる半裸の弓子の姿があった。
そこには、たしかなぬくもりが感じとれた。
弓子の腕は中島の手中にしっかりと握りしめられていた。
『白鷺……』
『二人とも助かったらしいな』
中島はゆっくりと上体を起こし、まわりを見回した。
蒼然（そうぜん）とした森林が二人を包んでいる。
『ここはどこなんだろう？』
中島の脳裏に、すべての記憶が徐々に鮮明さをとり戻しはじめていた。
あのオーロラの向こうにかいま見た世界は、のどかな田園風景だったように思える。
だが、今、二人は霧雨が森を包む音さえ聞きとれるほどの静寂の中にいた。
弓子のかすかに震える長いまつ毛に、杉の葉を伝い、雨の滴が流れ落ちる。

この可憐な表情のどこに、悪魔さえもひるませた超能力が潜んでいたのだろうか。
中島は弓子の頬をそっとなでた。
指先に冷えた水滴が光っていた。
寒い。
雨が気温を奪っていた。
中島は肌からはがすように湿ったシャツを脱ぐと、弓子の身体を抱き起こした。
が、白い華奢な肩にまわした手は、ねっとりとした感触に動きをはばまれた。
半ば凝固したどす黒い血が、中島の手を染めていた。
『僕のために……』
中島は思わず目をそむけた。
右肩から腰にかけ、弓子の白い背は無惨に切り裂かれ、骨がのぞいていた。
中島は胸から目頭に走る熱いものを押え切れなかった。
『弓子……』
中島の唇は、言葉のかわりに弓子の唇を捉えていた。
『どうして、こんなことに……』
ふっと弓子の瞼が動いた。
清廉な瞳が、彼の目を間近に見つめていた。
「ごめんなさい」

弓子の唇がそう呟いたように思えた。
「………」
中島には、弓子の言葉の意味がわかりかねた。
「ごめんね、中島君。私はもうすぐ死にます。あなたは私が甦ることを、本心から望んでくれるかしら」
「何を言ってるんだ。人はそう簡単に死にゃしないさ」
「いいえ、オーロラの中でイザナミがはっきりと私に告げたわ。あなたが私の復活を望んでくれるなら、私の屍をイザナミの墓の奥深く、彼女の眠る玄室まで運んでください。そうしたら私は甦って、もう一度あなたと一緒に暮らすことができるのよ」
弓子の瞳には、願いを込めた深い信頼の色が浮かんでいた。
「イザナミだって……？」
「そう。不思議な力だったわ。その力で彼女が私達を救ってくれたの」
中島ははじめて、これまでに何度か自分を襲った幻視の意味を悟った。
白鷺弓子はイザナミの転生だった。
それならば、突然の超能力やテレポートにも十分説明がつく。
弓子が激しくせき込んだ。
喉が震えたかと思うと、鮮血の塊りが中島の手に生温かく粘りついた。
「神話の世界のイザナギのように、私を途中で見捨てたりしないわよね……」

蒼白な顔が微笑(ほほえ)んでいた。

眠るように息を引きとった弓子の濡れた髪をなでながら、中島はその手に自然に力がこもるのを感じていた。

『必ず甦らせてみせるとも』

強い決意が中島の心を焦がしていた。

下草の合間から青蛙が顔を出し、低く喉を鳴らしはじめる。

一向にやむ気配もない霧雨が、弓子の亡骸(なきがら)を抱きしめる中島の体を、芯まで冷やしていた。

自分が今どこにいるのかさえわからない中で、どうやってイザナミの墓に到ればよいというのか。

そっと弓子を横たえると、中島は傍らに投げ出されていたハンドヘルドコンピュータを拾い上げ、スイッチを入れてみた。

幸い正常に作動するようである。

『せめてケルベロスを動かせれば』

祈るような気持ちでコマンドを入力する。

液晶ディスプレイに白いもやが現れたとき、中島はほっと安堵(あんど)の息をもらした。

電子獣は一声咆哮(ほうこう)すると、燃える目で主人を見た。

だが、ロキの触手に痛めつけられた傷跡が、ケルベロスから普段の精彩を奪っていた。

体すら一回り小さくなったように思えるくらいである。

これだけの傷を自然治癒させるには、数カ月はゆうにかかる。

むしろ、電子獣の構成要素であるデータの損傷を修正した方が、よほど早いだろう。

だが、それにしても、とうてい一日や二日で終わる作業量ではないし、今はそんな時間もない。

はげますようにケルベロスの大きな顎をなでると、中島は弓子の亡骸をその背に乗せた。早くも弓子の屍からはかすかな腐臭が漂いはじめている。

獣道を伝い十分も歩くと、ふいに木立が途切れた。

熊笹におおわれた急斜面の向こうに、霧雨に煙る山里の景観が浮かんでいる。

右手前方には巨大な石の墳墓が、後方には深緑の霊気を放つ小山が聳立している。

『あれは石舞台と多武峰。すると、ここは飛鳥！』

景観は中島の脳裏で、かつて憧憬をもって幾度も読み返した古代史の写真集に、ぴたりと重なり合っていた。

つかの間中島は、水墨画のような飛鳥の全景を目にして、呆然とたたずんでいた。

促すように魔獣が低い唸り声をあげる。

「わかったよ、ケルベロス」

深く息を吸いこむと、中島は右手のこぶしを握りしめ、手首に魔獣の鋭い牙を押し当てた。

一瞬、指先が力を失ったかと思うと、掌がたちまち紅に染まる。





中島は自らの血をもって、直径三メートルほどの円を描こうとしていた。
イザナミの墓所を探る、霊視を為すための魔方陣である。
雨が血を洗い流し、図形を歪める。
中島は貧血に足元をふらつかせながらも、根気よく陣を描き直した。
魔術理論に精通しているとはいえ、今までコンピュータに頼りきりであったため、自分の身一つで魔術を行うのは初めての経験である。
しかし、彼の表情に迷いはなかった。
円の中央に座すと、中島は呟(つぶや)いた。
「願わくば、イザナミの霊からの応答あらんことを」
印(いん)を結び、瞑想(めいそう)状態に入る。
弓子を想う気持ちと綾樫山自体の霊的力(パワー)が、彼を容易にトランス状態におとしこんだ。
中島は自分と弓子を結ぶ運命を、銀の糸として心の中にイメージしていた。
心象世界に想い描いた糸が、しだいに輝きを増す。
一段深い瞑想状態に入ると、中島は銀の糸のイメージを現実の情景に重ね合わせようと試みた。
多次元シミュレーションである。
極度の精神集中のため、顔中に深いしわがきざまれた。
やがて、イメージ世界の中で中島の紬(つむ)ぎあげた銀の糸が、小さな二連の丘、中腹までが耕さ

れて葡萄畑となった丘に吸いこまれていくのを、はっきりと見極めていた。
「あれがイザナミの墓所か」
瞑想状態から覚醒した中島は、膝をついて、現実の景観の中に瞑想世界との重複を求めて視線をめぐらした。
「あれだ！　あれがイザナミの墓なんだ」
中島は思わず声をあげていた。
石舞台と綾樫山を結び正三角形をなす点に、ぼんやりと二つの丘が浮かび上がっている。
かすかな腐臭をかぎつけたか、弓子のまわりに蠅が集まりはじめていた。
「行くぞ、ケルベロス」
蠅の群を手で追った中島は、弓子を抱き、電子獣にまたがった。

十聖高校では、廃墟と化したCAIルームに動く人影があった。
なんとか無傷で残ったホストコンピュータに向かって、ロキとの対話を試みる小原である。
肉体的負荷が少ないからだろうか、実体化できるようになったあとも、悪魔ロキは降臨するとき、デジタルデータの形をとることを好んだ。
――中島め、飛鳥なんぞに飛んでおったか。
――いかがいたします。生徒達をさしむけますか、それとも。
――いや、私が自ら出むこう。

ロキの口調には意志がこめられていた。

予想もしない反撃をうけ、手傷をおわされたロキは、魔界に帰還し二人の行方を探るべく、地上に見張りを放っていた。

蠅である。

蠅は魔界とアッシャー界を自在に往復できる数少ない生物の一つだ。

ロキには、すべての蠅と言葉をかわし、彼らが地上で知覚したすべての事象を自分の体験として感じとることのできる能力があった。

今まさに、ロキは飛鳥に棲む蠅から中島出現の報告を受け、再びアッシャー界に降臨したところなのである。

——それでは……。

小原はパソコンにコマンドを入力した。

中島の蓄えたデータベースの一つであろうか、画面に近畿一円の都市銀行のコンピュータに直結する電話番号が表示される。

小原は画面をスクロールさせ日本地図を呼びだすと、それを電話番号と対照した。

——桜井市の第四勧銀がよろしいかと存じます。

——よし。では、そこへ。

磁気テープがすさまじい勢いで回転を始めると同時に、画面が極彩色にそまる。

小原はモデム電話をセットすると、第四勧銀の電話番号を、一桁ずつ確かめるようにゆっくりとプッシュしはじめた。

砂利道にスニーカーを沈ませながら、ハイカー達が道を急ぐ。
あいにくの雨模様に、数少ない観光客の顔つきも、いずれもがうんざりといった様子である。
ケルベロスは弓子の屍を抱いた中島を背に、丘陵に続く道を疾風のごとく駆けていた。
目を炎と化した怪異な獣の体が、虎のようなしなやかさをもって地を蹴る。
けがのため平時ほどの力感に欠けるとはいえ、その雄姿には圧倒的な迫力がある。
だが、あまりに非現実的な光景は、かえってハイカー達の注意を引かなかったようだ。
「何よ、今のは」
「映画の撮影か何かじゃないの」
のんびりした声が中島の背後に遠ざかっていった。
やがてケルベロスは中島が霊視した丘陵に到着した。
全長二百メートルほどの丘陵が白鷺塚と呼ばれる古墳であることを中島は知らない。
これほどの大墳墓でありながら、白鷺塚には謎が多かった。
被葬者、構築年代はもちろんのこと、古墳自体が前方後円墳なのか、自然丘陵を利用した墓なのかさえ未だ明らかにされていない。
ただ、この古墳が女性を埋葬したものであるという言い伝えは古くからあり、「魏志倭人伝」

研究者の間では、これこそ卑弥呼（ひみこ）の墓であるという説もとなえられていた。

現在の白鷺塚は半分が畑として耕され、石室のある一帯だけが、わずかに熊笹の茂みと松林としてとり残されているにすぎない。

丘陵を登るにつれ、ケルベロスの歩みは目に見えて遅れはじめた。

「フォ、フォー」

荒い息づかいが背中にも伝わる。

石室の入口らしき部分が目に入ったとき、ついにケルベロスは足をとめた。

「どうした」

気づかうように、中島が背から飛びおりる。

耐え続けていた神経の糸が切れたかのように、ケルベロスは前足を折ると、どうと地表につっぷした。

ロキとの戦いの傷が悪化したのか、それとも白鷺塚に魔獣を苦しませるものがあるのか、もう一歩も進めないとでもいうように、魔獣は舌をたらし、低い唸り声をあげた。

その目から炎の輝きが失われている。

「よくやった。もう戻れケルベロス」

中島はハンドヘルドコンピュータに電子獣を納めざるをえなかった。

ほぼ同じころ、第四勧銀桜井支店のオペレーティングルームでは、四人の女子行員がその日

発生した他行への振替データをバッチ処理でホストコンピュータに入力していた。
四人ともキーボードには目も向けず、振替伝票の数字とディスプレイだけを交互に見やりながらキーを叩いている。
「もう、私の端末だけどうして故障するのよ」
そのうちの一人が苛々とした声をあげて椅子から立ち上がった。
三田良江。
入行二年目の利発だがやや気の短いところもある、勝ち気なＯＬである。
良江のおかっぱ頭が、他の行員のディスプレイをのぞきこんだ。
やはり調子のおかしいのは彼女の端末機だけのようだ。
画面が黒く塗りつぶされ、キーボードからの入力をまったく受けつけない状態になってしまっている。
「ホストからデータを送信してくるときに、そんなふうになるんじゃない？」
容貌から性格までことごとく良江と対照的な嶋村裕子が、目を自分のディスプレイに向けたまま声をかけた。
裕子は良江の一年先輩にあたる。
「私のだけですか？」
不満そうに顎をあげると、良江は背を向けた。
「しようがないわ。私、お茶でもいれてきます」

歩み去る彼女のうしろで、ディスプレイの表面から青いもやがにじみ出しはじめていた。

室内には、かすかに麝香（じゃこう）に似た刺激臭が漂いはじめたが、だれもそれに気づかぬくらいに各自が作業に熱中している。

良江の座っていた椅子の後ろあたりに、青いもやはしだいに実体を伴いはじめていた。

入力作業に疲れたのか、裕子が両手を突き出して天井に向かって大きくのびをする。

その白い喉（のど）に、不意にゼリー状の異物がからみついた。

「良江でしょ、いたずらはよしてよ」

欠伸（あくび）まじりに振り向いた裕子の眼前に、青銅のロキがいた。

その妖しい美しさが裕子に悲鳴を飲み込ませた。

悪魔の触手に力がこもった。

ギリッ、と音をたて、裕子の頭蓋（ずがい）はひしゃげていた。

「ヒィ――」

気配に振り向いた女子行員は、首から上が醜悪な肉塊と化した裕子の手が執拗（しつよう）にキーを叩き続けているのを見た。

二人のＯＬもまた、震える指先で意味のない数字を打ち続けていた。

その見開かれた両目が、ロキの不気味な笑いに緊縛（きんばく）されていた。

シュルシュルと触手が走り、ブルーの制服が粘液にとけてただれ落ちる。

陶器の砕け散る音が響く。

トレーに紅茶を運んできた良江が、信じ難い惨状に立ちつくしていた。
すでにその胸元にもロキの触手が伸びる。
乳房に粘性を帯びた熱が走り、次の瞬間、鮮烈な痛みとともに、裂けた肌からどろりとした血が吹き出していた。
「どうしたんだ！」
異様な物音に、金庫にしまう札束を抱えたままの男子行員がドアを蹴る。
その胸に、ロキは容赦なく、引きちぎった良江の頭蓋を叩きつけた。
「グエッ」
あばらの中に良江の首をめりこませたまま、男はひとたまりもなく壁際にはじきとばされていた。
ゆっくりと床の上に真新しい一万円札が舞い落ちる。
辛うじて非常ベルのボタンをさぐりあてた男子行員の指先が、渾身の力でそれを押し、やがて動かなくなった。
けたたましいベルの音が行内に反響する。
その喧噪の中に、ロキは悠然とブロンズの裸身をさらしながら、漆黒の目を飛鳥に向けていた。
ケルベロスを魔界に帰還させた後、弓子を背負った中島は、すでに白鷺塚の石室にたどりつ

いていた。

だが、熊笹の茂みをかきわけ石室をのぞき込んだとき、その顔は失望にくもらざるをえなかった。

地面に掘られた竪穴式の石室は、畳半分ほどの口を開け、彼の到着を待ち受けていた。

しかし、その中の広さはせいぜい三畳もあればいいというところだろうか。

中島が背をかがめて、ようやく中に立てるほどの大きさなのである。

これほどの大墳墓の玄室にしてはいかにも小じんまりとしている。

本当にこんなところにイザナミが眠っているというのか。

自分の霊視が誤っていたのではないか。

『慌てるな。石室にはからくりがつきものじゃないか！』

中島は自らをはげましながら、やっとの思いで石室に降り立った。

ひんやりと冷たい空気が澱んだ石室。玄武岩の石壁は湿気をおびている。

中島はおぶった弓子を、そっと床の上に降ろした。

隅に隠れて闖入者の動向をうかがっていた蛙が、もの珍しそうに、おっかなびっくり姿を見せる。

かまわず彼は石の床に坐ると、瞑想状態に入った。

イザナミとの接点を見つけるためである。

だが、気持ちに焦りがあるせいか、彼の心象風景には何の変化も起こらず、いたずらに時間

ばかりが費やされてゆく。
眉間に深いしわが刻まれた。
「感じられない。さっきよりずっとイザナミの懐に近いはずなのに。イザナミ、答えてくれ。どうすればあなたに会うことができるのだ」
かすれた声で訴えたとき、応えるように石室を強烈な震動が襲った。
『地震か？』
目をつむり、床に手をついた中島の背に、ぱらぱらと土ぼこりが落下する。
ほこりにむせかえりながら、無意識のうちに彼は弓子の死体を抱きかかえていた。
死臭も気にならぬようである。
「イザナミ、応えてください。弓子を甦らせるために！」
呪文のように中島は何度も呟いていた。
やがて地震がやんだとき、何かを訴えようとするかのように、蛙の鳴き声が急に大きくなった。
ふと、その方向を見た中島の目が輝いた。
地震で敷石と敷石の間に隙間が生じ、個々の敷石の側面に塗られていた朱が浮かび上がって見えていた。
それが魔除けのために塗られた硫化水銀だとは中島に知るよしもない。
駆けよると、赤い線にそった隙間から冷気が流れ出しているのがわかる。

石と石の裂け目に指をねじ入れ、力をこめる。

敷石の一つが苦もなくはがれ、ぽっかりと人一人が入れるほどの空洞があらわれた。

空洞はゆるやかな勾配（こうばい）を描きながら、地底に向かって続いていた。

完璧（かんぺき）な闇である。

だが、中島は迷わなかった。

シャツを引き裂き、弓子とハンドヘルドコンピュータを体に結（ゆ）わえると、腹這（はらば）いになり足を穴に踏み入れた。

磨きあげられた大理石のようになめらかな手のひらの感触が、穴が人工のものであることを証明していた。

滑り落ちまいと、四肢をふんばり、頭を上にして、中島は慎重に闇の中へ降りていった。

白鷺塚を見下ろす、多武峰（とおのみね）の山頂。

第四勧銀に出現したロキは、桜井市から多武峰に入った。

眼下に飛鳥の巨石群が並ぶ。

ロキは霧雨を顔にうけながら、天に向かって咆哮（ほうこう）する姿勢をとった。

喉が異様に膨らみ、青銅の唇がぶるぶると震える。

その喉の発する超高周波帯の音は、普通の人間が聞きとることはできない。

だが、飛鳥各地からその音に引き寄せられたように、米粒ほどの黒い点が雨をつっきり、ロ

キに向かって翔(と)んできた。

魔界から放った蝿である。

集まった蝿はロキの顔を毛深い足でいとおしそうになでながら、耳穴に落ち、一匹一匹何ごとかを囁(ささや)いた。

ロキは鷹揚(おおよう)にうなずいている。

「ようし、行け!」

必要な情報採取を終えた悪魔が命じると、蝿は自分の持ち場に帰っていった。

額の傷に手をあてながら、ロキは白鷺塚を見つめていた。

『中島め、どういうつもりであんなところに』

ロキほどの大悪魔が、単なる復讐の目的だけで中島を追っていたとは考えられない。

おそらくロキは、中島と他の悪魔が手を結ぶのを、何よりも怖れていたのだろう。

中島の開発したデジタルデータ移動方法に習熟すれば、自分一人でアッシャー界を支配することも夢ではない。

だが、それは他の悪魔にとっても同じことだ。

『私以外の者がデジタルデビルとなることは断じて許さん』

他の悪魔への技術の伝播(でんぱ)を防ぎ、アッシャー界における自分の優位を確立するためには、中島の口を封じる必要がある。

もう少しで、それは完了するはずであった。

『あの女さえ現れなければ！』

だが、人間の女に悪魔を傷つけられるような力があるはずがない。

おそらくは、神か悪魔かがあの女に憑依（ひょうい）したのだろう。

「だれだろうと容赦せん、今のうちに叩き潰（つぶ）してくれる」

呟くと、ロキは白鷺塚をめざし一気に急斜面を駆けおりた。

第五章　炎の剣

穴は緩やかに下りながら、どこまでも続いていた。

中島は四肢を緊張させながら、そろそろと後ずさりを続ける。

荒い呼吸が滑(なめ)らかな壁面に反響しながら、もうはるか上になった入口の方へと消えていく。

その残響が背中におぶった弓子の息づかいのように思われ、中島は幾度となく踏みとどまって耳をこらした。

だが、屍(しかばね)はずしりと肩にのしかかったまま、動きを止めた中島の身体に死臭をまとわりつかせるばかりである。

時間の感覚はすでにない。

地球の中心まで続いているのではないかと思わせるほどに、長く遠い石穴である。

二人分の体重を支える手足はしびれ、したたり落ちる汗が踏んばりを危うくする。

中島は身体(からだ)を器用によじって靴と靴下を脱ぎ棄(す)て、裸足になった。

これで少しは足下が確かになる。

自分一人なら、この穴をすべり降りていくこともできたかもしれない。

けれども、このゆるやかな傾斜がどこまでも続いているとは限らない。
もし、弓子の亡骸（なきがら）に致命的な傷をつけてしまったりしたのでは、何のためにこんな苦労をしているのかがわからなくなってしまう。
何の前触れもなく、足が空を蹴った。
「あっ」
叫ぶ間もなく、絶望的な喪失感が全身を走りぬけた。
指がむなしく空をつかむ。
一瞬の後には、中島の身体は堅い石床にいやというほどたたきつけられていた。
まっすぐに二、三メートルは落ちたのだろう。
無意識のうちに亡骸をかばっていたせいか、額や肩に必要以上の衝撃をくらったようである。
ただ幸いなことに、どこも骨折したりした様子はない。
長い緊張から解き放たれた中島は、身を起こす気力もないままに、いつしかまどろみに落ちていった。

そこにはかすかな光と、ゆったりとした空気の流れがあった。
さわやかな冷気に頬（ほお）をなでられ、中島は重い瞼（まぶた）をあげた。
少し離れて弓子の亡骸が静かに横たわっている。
思いのほか、身体は軽かった。

石床に打ちつけた痛みも、さして気になるほどではない。

中島は気合いを込めて立ち上がると、深く息を吸った。

目が慣れてくるにつれ、周囲の様子がはっきりとしてきた。

何という不思議な光景だろう。

中島は聳(そそ)り立つ岩壁の狭間にできた石床の広場に立っていた。

岩壁の玄武岩に似た岩肌は、朱色に染まっている。

その壁の三メートルばかりの高さのところに、ぽっかりと黒く口を開けているのが、きっと、今、中島が下りてきた石穴なのだろう。

ここが地の底である限り、上には天井にあたる部分があるはずなのだが、見上げても朱色の岩は朦朧(もうろう)とした闇に吸いこまれるまで、垂直に切りたった壁をなしている。

広場の先には、細い道が底知れぬ闇に向かって延々とのびている。

これがイザナミの玄室に続く羨道(せんどう)なのだろうか。

中島は広場を横切って、小道の入口に近づいてみた。

さっきまでの石穴とは違って、あくまでも自然が作りあげた地底の渓谷である。

かすかな燐光(りんこう)は、岩肌にはびこった苔状(こけじょう)の植物が発するものらしい。

中島は腐乱した女の屍に追われた青年が駆け抜けていった、あの幻視世界に見た谷の光景を思い出していた。

ぽたりと、粘り気を帯びた水のしずくが頬を打つ。

耳をすますと、はるか上方から落ちてくる水滴が、規則正しいリズムを刻んでいる。その石灰質の水滴が、小道のあちこちに気の遠くなるような時間をかけて石筍を築きあげている。

中島は聳え立つ岩壁の肌に手を触れてみた。

冷たい岩の表面は、じっとりと濡れている。

爪を立ててみると、湿気におかされた岩肌はたやすく剝がれ落ち、新しい朱色の層をあらわにする。

どうやら、岩石自体が硫化水銀を含んでいるらしい。

『悪魔の追撃をまぬがれるには、絶好の場所なのかもしれないな』

中島の脳裏を、クラフトのメッセージがよぎった。

もちろん、今の中島には、ロキの魔手がすでに間近に迫りつつあることなど、知るよしもない。

『とにかく、早く弓子を甦らせなければ』

中島はふたたび弓子の亡骸を背負うと、朱の渓谷の奥に向かって歩きだした。

もともとそう体力のある方ではない。

十分もたたないうちに、もう足もとがふらついてくる。

けれども、何が起こるかわからない状態で、ケルベロスをこれ以上疲れさせたくはなかった。

それに硫化水銀が退魔の力をもつとすると、この羨道は魔獣にとっても条件のいい場所とは

言えないはずである。

中島は息を弾ませながら、石筍の突き出た羨道を進んでいった。

額をつたう汗にくもった目は、足元をたしかめるのが精一杯だった。

汗をはらいのけようと首を振ったとき、はじめて視界のすみに白い人影が映った。

「だれだ！」

気づいてみると、人影は一つや二つではない。だが、そのいずれもが一向に動く気配もなく、ひっそりとたたずんでいる。

おそるおそる近づくと、見事に白蠟化したミイラが首をかしげ、黒い眼窩を空に向けていた。

水銀の力か地下の冷気のせいか、遺体には自然の防腐作用が施されていた。

その胸部に、人為的にうがたれたものと思われる大きな穴があいているのが不気味である。

燐光のわずかな光の中にも、十数体のミイラが無秩序に散らばっているのが認められる。

その多くは何者かに骨を嚙み砕かれ、もしくは喉元を切り裂かれた痕跡をとどめている。

着衣を見ると、ミイラはさまざまな時代の遺骸をとりまぜているようである。

粗末な貫頭衣をまとった遺骸が多い中、江戸時代の盗賊のものと思われるミイラも混じっている。

おそらくは、墓荒らしの目的で忍びこんだ者達なのだろう。

その彼らを、いったいだれがこのような姿に変えたのか。

「イアー」



突然、異様な叫び声が中島の耳を襲った。
「イアー、ルルー」
声は今度は少し遠くから聞こえてきたように思えた。
音が複雑に反響する羨道の中では、耳の遠近感はおよそあてにならない。
中島は横目で惨殺死体のミイラを見やった。
墓を荒らそうとした者達を容赦なくやっつけた墓守りが、もし今も玄室への羨道を守り続けているのだとすると……。
思わず身震いした中島の間近に、岩壁の陰から、ぬっとそいつは現れた。
「黄泉醜女（ヨモツシコメ）！」
中島はそう叫んでしまっていた。
幻視世界で見た怪女が、強烈なイメージでその名を中島の脳裏に刻み込んでいたのだろう。
だが、今、目のあたりに見る黄泉醜女は、イメージよりもはるかに奇怪な姿をしていた。
背丈（せたけ）は中島のちょうど倍くらいか。
紫色の斑（ふ）がにじみ出した短い足は、白くぬめぬめと光り、その足に支えられた胴は妊婦のように膨れあがっている。
申し訳程度に身にまとった貫頭衣は、へそのあたりまで垂れ下がった乳房を覆うべくもない。
長い水かきのついた両手が所在なげにぶらぶらと揺れている。
顔はまるで緑色の蛙そのものである。

息を吐くたびに顎の両側にあるえら状の穴が広がり、奥でピンクの肉ひだが脈打っている。

長い髪が、こればかりは女の黒髪さながらにつやつやと輝いているのが、なおさら気味悪い。

怪女が一歩こちらににじり寄った。

中島は掌の冷や汗を腰で拭うと、ハンドヘルドコンピュータに手をやった。

「ケルベロスよ、出てきてくれ」

だが、液晶ディスプレイから湧き出た白いもやは、輪郭をあらわにする前に、弱々しい吠え声をのこしたきりで消失してしまった。

やはり羨道の朱が、魔獣の力を封じているのだろうか。

立ちすくむ中島の肩めがけて、黄泉醜女の水かきが振り降ろされる。

横に跳んだ中島は、石灰質の水に足を滑らせた。

体勢を立てなおしたときには、すでにぬるりとした粘膜が中島の身体を捉えていた。

勝ち誇ったような吠え声をあげ、黄泉醜女は両腕で中島を抱えあげた。

長い舌が、巨大な口のまわりを舐めまわしている。

生臭い息が、中島の顔面に吐きかけられた。

「イザナミ、ここまでやって来たというのに、今さら僕を見捨てるのか！」

中島は怪女から顔をそむけ、天空の闇に向かって叫んだ。

ところがどうしたことか、中島の叫び声を聞いた途端に、怪女の様子がおかしくなった。開いた口をすぼめ、きょとんとした表情で中島を見やる。

殺気はすでに消えていた。
その目がぐるりと巡(めぐ)って、羨道の傍らに横たえられた弓子の亡骸をとらえた。
たちまち黄泉醜女の表情に、畏怖が広がった。
「イザナミ……」
怪女の喉は、たしかにそう唱えていた。
中島を下に降ろすと、怪女はバタバタとみっともなく弓子に走り寄り、その亡骸を壊れものを扱うように、そっと抱えあげた。
「待て、弓子をどうするつもりだ」
叫んだ中島を、非難めいた視線で一瞥(いちべつ)すると、黄泉醜女はついて来いとでもいうように顎をしゃくりあげ、弓子を抱えたまま羨道の奥へと歩きだした。

そのころ、早くもロキは中島の入りこんだ竪穴(たてあな)の前に立っていた。
「待っておれ中島。もうすぐお前の目の前で、大事な女の屍を喰ろうてやる」
歪んだ微笑をうかべながら、ロキは自らの体を不定形(カオス)に変えた。
ゼリー状の肉塊と化したロキは、やすやすと石穴を下っていった。
中島にとっては地獄に感じられた道のりが、悪魔をはばみ得るわけもない。
間もなく肉塊はドサリと音を立て、羨道の入口である広場の石床に転げ落ちた。
ところがその途端、肉塊をとりまくゼリーの表皮が、ぶすぶすと煙をあげて溶けはじめた。

「おのれ、朱か」
すばやくブロンズの肉体に姿を戻したロキが、いまいましげに唸った。
ゼリー状の体形のままでは、硫化水銀のおよぼす化学変化に耐えかねたのだろう。
石床に膝をついたロキの、ただ一カ所粘膜部を残した眉間が、ドクッドクッと激しく脈をうっている。
朱の羨道を見すえるロキの漆黒の目には、これまでにない厳しさがあった。

どのくらい歩き続けただろうか。
黄泉醜女(ヨモツシコメ)に導かれた中島は、やがて羨道の行きつく先に立っていた。
目の前に玄室がある。
捜し求めたイザナミの墓所に違いあるまい。
『とうとう来た』
玄室にはことさら扉は設けられていなかった。が、入口近くの床には、銀の螢光(けいこう)を発するレリーフが一つ、中を守るように霊気を発散させている。
ソロモンの六角形に似た図形のレリーフである。
黄泉醜女が中島を促すように顎をしゃくった。
そして、玄室に足を踏み入れようとする中島の背に、そっと弓子を背負わせた。
「お前は入らないのか？」

中島が声をかけると、怪女は畏れの表情を浮かべて首を振る。
何を思ったか、黄泉醜女は突然長い腕を自分の口の中に突っこんだ。
肘までが、すっぽりと口の中に吸い込まれる。
緑色の首がもこもこと膨れあがり、怪女は激しく嘔吐した。
酸味を含んだ異臭に、中島は顔をそむけた。
黄泉醜女は吐瀉物の中から、青い光を放つ二つの玉を拾いあげると、中島に向かってさし出した。
あまりいい気持ちはしないが、怪女の好意を無視するわけにもいかない。
中島は顔をしかめながら、片手を出してそれを受けとった。
粘液をこびりつかせた二個の玉は、思いのほか軽く、ぴったりと中島の手になじんだ。
「なんだい、これは?」
怪女が水かきのついた手を打ち合わせるまねをする。
「こうやって、打つのか」
おそるおそる二つの玉を触れあわせると、小さな火花がとんだ。
うなずくと、黄泉醜女は口をゆがめ、目を細めてみせた。
『こいつ、笑ったのかな』
中島は、今やこの怪女に親しみすら覚えていた。
そのとき、遠く、今来た羨道の彼方から人の叫び声のような物音が聞こえた。

怪女がビクリと体を揺らす。

やがて、黄泉醜女は、名残り惜しそうに何度も振り返りながら、羨道を引き返していった。

中島は背にした弓子を落とさぬように身をかがめながら、怪女のくれた二つの玉をズボンで拭(ぬぐ)い、今度は力をこめて打ちつけてみた。

明るいオレンジ色の火花が八方に飛ぶ。

が、それ以上に特に変わったことが起きた様子もない。

『儀式か何かに使うものなのかな？』

答えを見いだせないまま、中島は二つの玉をポケットにしまい、レリーフをまたいだ。

玄室の中には、かすかに花の香が漂っている。

広さは六メートル四方というところだろうか。

中島の腰までもある壺(つぼ)が所狭しと並べられており、その数は十や二十ではない。

中を覗(のぞ)いてみると、底の方に油がたまっている。かすかな花の香はそこから漂ってくるものらしい。

『香油？』

正面には白い花崗岩(かこうがん)で作られた台が設置されている。

その台の上には十字架の形に、いや、見ようによっては人が仰臥(ぎょうが)した形に、灰がつもっていた。

玄室に中島を送り届けた黄泉醜女は、何ものかの気配を感じ、歩みを早めた。
『侵入者の多い日だ』
などと怪女が思ったかどうか。
まもなく、黄泉醜女は、羨道を駆け抜けてきたロキに真正面から向かい合っていた。
水かきのついた両の手を、精一杯に広げて行く手をさえぎる怪女。
「ラウイェレ」
喋(しゃべ)るには不自由な口を使い、黄泉醜女は何かを伝えようとする。
怪女にはこの相手が、これまで墓を荒らしにやってきた人間どもとは全く異質の、並々ならぬ力を備えた存在であることがわかっていた。
できれば戦わずに追いはらいたい。
一方、ロキも、ふいに出食わした相手の力を値踏みするかのように、立ち止まったまま漆黒(しっこく)の目を細くした。
やがて、その視線がそれたかと思うと、ロキはそれきり怪女の方には目もくれず、平然と羨道を先へと進みはじめた。
なおも遮(さえぎ)る黄泉醜女の肩に、目に見えぬほどのスピードで青銅の腕が飛ぶ。
声をあげる間もなく、怪女は壁にたたきつけられていた。
紫の斑(ふ)のある足が、じたばたと石床を蹴る。
「おまえごときに、この私を止めることができると思うのか」

ようやく起き上がった黄泉醜女を、ロキの咆哮が迎えた。
「イルラー、リイ」
気をとり直した怪女は、威嚇の叫びをあげながら、長い腕を鞭のようにしならせる。
だが、ロキは凄じい勢いで襲いかかる怪女の腕をよけようともせずに、軽く手刀を放った。
次の瞬間、怪女が悲鳴をあげてのけぞった。
水かきがロキの手刀で突き破られ、鮮血をほとばしらせている。
間髪を入れず、ロキは次の一撃を放った。
たちまち、黄泉醜女のもう一方の腕は肘から下がちぎれとんでしまっていた。
かなわぬと見たのだろう。
怪女は身を捨てて、圧倒的な体重でロキにのしかかった。
ふいをつかれたロキが、もろともにどうと石床に倒れ落ちる。
だが、ロキの首を噛み裂こうとした怪女の牙は、青銅の皮膚に引っかき傷すらつけることもできず、カチカチと乾いた音をたてた。
やがてゆるやかに、力を失った黄泉醜女の体が持ち上げられた。
立ち上がった悪魔のブロンズの腕は、怪女の胸を深く突き破っていた。
ロキはぐいと掌に力を込め、怪女の胸から心臓をつかみ出した。
「グエー」
苦痛に歪んだ黄泉醜女の顔が、ロキの手から溢れ落ちた体液に、ぬらぬらと輝いた。

もはや断末魔の怪女を無造作に投げ棄てると、ロキは何ごともなかったように先を急いだ。
「イザナミ、イザナミ……」
黄泉醜女の哀しげな叫びも、すでに空気の流れほどにかすかなものになっていた。
『イザナミの墓にやって来たものの、いったいどうやって霊とコンタクトをとればよいのか……』
弓子の亡骸を壁にもたせかけ、中島は途方にくれていた。
ふいにその背筋に悪寒が走る。
振り返った中島は、玄室の入口から中を覗きこむ悪魔を見た。
「ロキ……」
「無事で何よりだったな」
苛立ち(いらだ)を無理におし殺したような声である。
銀のレリーフの霊力が、悪魔にこの玄室に足を踏み入れることを許さないのだろう。
「ナカジマよ、私を怖れることはない。再び私と結べば、お前は人間界をわがものとすることさえできるのだ」
「黙れ、ロキ。僕を殺そうとしておきながら。第一、僕はきさまから逃げ出したかったわけじゃない。僕はどんなことをしてでも、弓子を甦らせなければならないんだ。お願いだから邪魔をしないでくれ！」

「女を甦らせるだと？ そんなことなら、なぜ、私に頼まぬ。お前に反魂の術を授けてやることなど、たやすいことだわ」

反魂の術が、中世の修験者が得意とした死者復活の呪法であることは、中島もよく知っていた。

ただこの秘術も、肉体を甦らせることはできはすれ、魂を甦らせることまでは不可能とされている。

「反魂の術だって？ きさまは無垢な弓子の魂を、悪魔の魂に置きかえようというのか」

「無垢？」

悪魔はせせら笑いを浮かべていた。

漆黒の目が中島を威圧するかのように、大きく見開かれた。

「一度悪魔と手を結んだ人間には似合わぬ言葉だ。見ろ、私の目を」

逆らい難い力がその声には込められていた。

中島はロキの瞳の奥に映し出された凄惨な情景に、思わず息をのんだ。

悪魔の触手に搦めとられ、首をちぎられる人々。

溶け落ちる眼球。

溢れ出る鮮血。

近藤が、京子が、見知らぬ女達が呪詛の目で中島をにらむ。

悲鳴さえもが聞こえてくるようだ。

「ナカジマ、よく見るのだ。すべてはお前の望んだことだったはずだぞ。この私をアッシャー界に呼んだのが、他ならぬお前なのだからな」
ロキの哄笑が中島の心を激しく揺さぶった。
だが、かすかに漂う花の香が、今にも崩れそうな中島の精神力を辛うじて支えてくれた。
「今の僕にできることは、せめて弓子だけでも甦らせてやることだ」
「反魂の術も用いずに、たかが人間がどうやって死者を甦らせようというのだ」
「たしかに僕には何もできはしない。けれども、この玄室に眠るイザナミの霊が、それを叶えてくれるのだ」
「たわけたことを」
ロキは牙を見せて笑った。
が、その唇はどこか不自然に歪められていた。
青銅の皮膚でカバーしているとはいえ、朱が着実に悪魔の肉体を蝕んでいるのに違いない。
「ならばよかろう。それほどまでに屍が大切なら、じっくりと戯れるがいい」
いつしかロキの笑いは、怒りを込めた咆哮に変じていた。
その漆黒の瞳が、憎しみを帯びて、弓子の亡骸に向けられていた。
見る間に屍は白い湯気を立ちのぼらせ、強烈な腐臭が鼻をついた。
「やめてくれ！」
叫び声とともに駆け寄った中島の手が、弓子の首筋を捉えたと同時に、はがれ落ちた皮膚と、

どろりと滲み出た肉汁に濡れる。

たまらず中島は、どす黒い肉汁のついた手の中に嘔吐した。

弓子の首がぎくしゃくと傾いたかと思うと、眼球が血の糸をひきながら床の上にこぼれ落ちる。

崩れた鼻のあとには、肉片の付着した髑髏の穴があった。

頭皮をつけたままの髪がばさりと床に散る。

ざくろのように裂けた唇からは、むき出しの歯がのぞく。

半ば呆然と見つめる中島に、さらに深い恐怖が追い撃ちをかけた。

弓子の手が、ゆっくりと動きはじめたのである。

中島は全身に冷や汗を流しながら後ずさっていた。

「どうしてこんな目にあわせるの？　早く楽にして」

ついに弓子は、自分の力で立ち上がっていた。

機械のようにぎこちない動作である。

「お願い。早く楽にして……」

不明瞭な言葉を口にしながら、弓子は中島に迫る。

一歩進むたびに壺が倒れ、中の香油が流れ出る。

骨と肉片の入りまじった指が、中島の手を捉えようと、しきりに空をつかんでいる。

もはや中島はすべての理性を失っていた。

おぞましげに弓子の手を払いのけると、玄室の中を逃げまどった。

弓子はゆっくりと、だが中島との間の見えない糸をたぐりよせてでもいるかのように、着実に迫ってくる。

花崗岩の台に手をついた中島は、無意識のうちに灰を握りしめると、弓子めがけて投げつけていた。

灰を退魔の道具として使う魔術師の潜在意識が、中島にそうさせたのかもしれない。

壺から流れ出た香油の上にふりかけられた灰は、風もないのに空中を舞いあがると、ホログラフのような立体感をともなった映像を形作りはじめた。

弓子の差し出す手が、今や追いつめられた中島の首を捉えようとした瞬間、その体が突然、朱の閃光に包まれた。

屍を操っていた魔術がとけたのだろう。

弓子の亡骸はたちまち力を失くし、床にくずれおちた。

「よく来ましたね、中島」

柔らかな声にそう呼びかけられて、ようやく中島は我に返った。

裸形の女性が、じっと自分を優しい眼差しで見つめている。

弓子にそっくりの女性である。

いや、似ているのは輪郭だけなのかもしれない。

神性を包みかくす乳白色の肌は、かすかな燐光（りんこう）を放ち、鳶色（とびいろ）の瞳には人間とは明らかに異な

る知恵と豊穣の煌きがある。
知らぬうちに中島はひざまずいていた。
「イザナミ……」
うなずくと、女神はゆっくりとロキの方に向きなおった。
「悪魔よ、魔界に帰るのです」
凛とした声である。
ロキの表情は冷笑を保っていたが、そこには一抹の戸惑いが隠し切れずに浮かんでいる。
「見たところ、倭の国つ神のようだが、なぜ、それほどまでにこやつらに肩入れをする？」
「それは、この娘が私の生まれかわりだからです」
「生まれかわり……」
ロキは大仰に両手を広げてみせた。
「では、その女はお前にくれてやろう。そのかわり、男は私がもらいうける。私と結ぶことはこの者にとっても決して損にはならぬのだ。私とて無用の争いを避けたい気持ちに変わりはない」
固唾をのんで二人のやりとりを見守っていた中島の背筋を、冷たいものが走った。
だが、イザナミの微笑が中島をすぐに安堵させた。
「おおかた、中島の知恵を他の悪魔にとられるのが怖いのであろう」
イザナミはそう言うなり、瞳をこらしてロキの胸を凝視した。

青銅の胸板に赤光が飛ぶ。
弓子に憑依したときとは比較にならぬパワーである。
たまらず、よろけるロキ。
「それが、お前の答えか」
怒号を発したロキの頭髪が、怒りに逆立っている。
だが、銀のレリーフは、依然として悪魔が中に入るのをはばんでいた。
ロキは玄室の入口に仁王立ちになって、女神を睨みつけた。
イザナミの自然発火の霊力も、この漆黒の双眼には通用しないらしい。
イザナミの視線は、そのまま無限の暗黒に吸い込まれてでもいるかのようである。
ふいに女神の表情がくもった。
中島はロキの目の奥に、白いぼんやりした映像が浮かんでいるのに気付いた。
『あれは……』
ロキの瞳は、中島がかつて見た幻視世界へとつながっていた。
溶けて醜悪な屍と化し、なおも愛する男を追い続ける女の姿は、まごうことなくイザナミ自身であった。
「イザナミよ、見るがよい」
ロキの低い声が女神の胸を貫いた。
「私の瞳は、お前の心の中に潜む恐怖を鏡のごとく映しだすことができるのだ。見つめれば見

つめるほど、お前は自らの恐怖におののくことになる。ファッ、ファッ、ファッ。それにしても醜いものだ。これが本当のお前の姿だとは、私にも信じられぬわ」
ロキは追い撃ちをかけるように、今一人の映像を浮かび上がらせた。
醜いイザナミにすがりつかれ、恐怖にすくむ青年、イザナギの姿である。
「醜さゆえに、つれあいにも逃げられたか！　哀れなことよ、ファッファッ……」
「卑怯（ひきよう）な」
屈辱に我を忘れたか、イザナミは吸い寄せられるようにロキの方へと足を踏みだした。
「だめだ、イザナミ。玄室の外へ出たら、ロキの思うつぼだ」
中島の叫びに辛うじて踏みとどまったイザナミの背後に、何ものかの影が走った。
ロキの左手が、奇妙なリズミカルな動きを見せている。
それが屍をマリオネットのように操る魔術だと気づいたときは、すでにもう遅かった。
背中を弓子の屍に押されたイザナミは、ふいをつかれて、思わず玄室の外へ歩み出てしまっていた。
ロキの動きは敏速であった。
霊力を持つ視線を避けるべく、足を払ってイザナミをうつぶせに倒すと、その右腕を後ろ手にねじりあげた。
「口ほどにもない。女の身で私に逆らおうなどと」
悪魔の下半身、イザナミに触れている部分だけが、ブロンズからピンクの原形質へと変化し

はじめた。

「倭の国つ神よ、悪魔の子をはらませてやる」

清冽(せいれつ)の気を汚すような異臭が玄室に漂いつつあった。

中島にはイザナミの目が救いを求めているように見えた。

だが、女神さえをもいともたやすく組み伏せた悪魔に対し、武器ひとつ持たぬ中島に何ができるというのか。

最後の望みを託し、中島はハンドヘルドコンピュータにコマンドを与えた。

朱の羨道では実体化に失敗したものの、玄室の霊気は電子獣が本来の力を取り戻す触媒となるかもしれない。

中島の願いを感じとったか、姿を現したケルベロスは、一声玄室を揺るがす咆哮を放つと、指示を待つように身構えた。

「ケルベロス、イザナミを救うんだ！」

戦う前から勝敗はわかっている。

ケルベロスがたとえベストの状態であったとしても、魔物としての格の違いがもたらす結果は、すでに中島も目(ま)のあたりにしているのである。

しかも、魔獣は今、傷つき疲れはてている。

それでも、ケルベロスは果敢にロキ目がけて飛びかかっていった。

魔獣もその本能で、この恐ろしい敵の唯一の弱点が額の原形質部分にあることを見抜いてい

るのだろう。
ロキの青銅の手刀にはばまれながらも、ケルベロスは執拗にロキの額に攻撃をしかけていた。
ただロキも、イザナミを抑えつけている限り、右腕はふさがれたままである。
ケルベロスに左腕を噛みつかせれば、一瞬額を狙える隙が生じるのではないか。
中島は興奮に身が震えるのを感じた。
イチか、バチか。
イザナミが死ぬようなことがあれば、どのみち弓子を救うことも叶わない。
そのとき中島は、苦しげな女神の口元が自分に何かを必死に訴えかけていることに気づいた。
「早く、火を」
イザナミはたしかにそう叫んでいた。
『火？　火をどうしろというんだ……』
天啓のように、中島は黄泉醜女のくれた二つの玉のことを思い出した。
祈るような思いで玉を打ちあわせる。
二度、三度、青白い火花がとぶばかりで何も起こらない。
『イザナミが望んでいるのは、本当にこんなことなのか……』
焦燥に掌が汗ばむ。
ほとんど投げやりな気持ちで打ち合わせた玉から生じた火花が、香油に燃えうつった。
たちまちゴオーッと音をたてて燃えあがった炎が、不思議なことに空中に円を描く。

透明なオレンジに縁どられた青白い炎の中央部が、やがてぼんやりと人の顔を形どり、意志あるもののごとくに揺らめいた。

『ヒノカグツチ……』

イザナミが最初の死の直前に生み落としたといわれる、火の神ヒノカグツチ。

誰に教えられたわけでもないのに、中島はその名を知っていた。

本能的に中島は、右手を炎の浮かぶ宙にさしのべていた。

竜巻を思わせる空気の渦とともに、ヒノカグツチの炎は中島の手にまとわりついて、螺旋(らせん)模様を描く。

中島は唇をかみしめ、その熱に耐えた。

それは皮膚を火であぶられるような痛みではなく、火と接する部分の血肉が異常にたぎり、熱を発してでもいるかのような苦しみであった。

まばゆいばかりの閃光(せんこう)が、炎をまとった中島の手を一瞬、空に消した。

戦いを続けていた悪魔と魔獣さえもが、束の間動きを止めるほどの凄まじい光であった。眩(くら)んだ目をしばたいた中島は、天に向けた自らの手に、朱の燐光を発する一振りの剣が握られているのを知った。

かつて体験したことのない、強力なパワーが体中に満ちてくる。

「イエーッ」

ためらわず、中島は玄室を飛び出していた。

その目はロキの額だけを見つめていた。
気圧（けお）されたか、ロキの動きが鋭さを欠いた。すかさずその手に牙をたてたケルベロスを振り払おうとした瞬間、ロキの視界に朱の刃（やいば）がとびこんできた。
反射的にイザナミから手を離して額をかばった悪魔の右腕を両断し、中島の剣は見事に眉間に突き刺さっていた。
「ギャーッ」
絶叫が羨道の岩壁を揺るがした。
剣を突き立てたままの額を左手で押えながら、ロキはよろめくように立ち上がった。
原形質に転じていた下半身はもとより、悪魔の青銅の上半身にも急激な変化が起きつつあった。
シュルシュルという不快な音とともに、ブロンズの皮膚が、その中に包まれていたゼリーの肉塊が崩れ落ちる。
見る間にロキの全身は、ぶよぶよと波打つ不定形（カオス）に転じていた。
自分の思いがけない力に呆然と立ち尽くしていた中島の前で、不定形（カオス）の一部が激しく脈動しはじめた。
と、唐突に緑色の心臓がそれ自体別の生命を宿してでもいるかのように、原形質を突き破り、石床にのがれ出た。
それは、流れ出る緑の血で奇怪な図形を描こうとしていた。

図形の描かれた石床を中心に、空間が微妙にねじれはじめたように思われた。

「あの心臓が悪魔の本体です。中島、悪魔を逃がしてしまってはなりません」

イザナミの声にわれに返った中島は、ヒノカグッチの剣を拾いあげるなり、きっ先を半ば空間の歪みにのがれつつあったロキの心臓に突き刺した。

底知れぬ静寂を伴って、心臓は破れた風船のようにくだけ散った。

不定形（カオス）が脈動を止めた。

その静寂は、次の瞬間には地底の渓谷を根底から揺るがす轟音（ごうおん）となって、中島の全身に襲いかかった。

闇につつまれ、さだかに見えぬ天空から、朱の岩が石片となって降りそそぐ。

火山の鳴動の只中を這（は）うように、中島は剣を手にしたまま、玄室の中に転がり込んだ。

壺が次々と倒れ、香油があふれ出る。

地獄絵には似つかわしくない優しい花の香が、玄室を包んでいた。

「弓子……」

玄室の入口に、白く輝く影を認めたとき、すでに中島の意識は遠く宙をさまよっていた。

終章

トクッ、トクッ。

何かが脈打っている。

かすかな、けれども確実な律動である。

少し前に、すでに中島は目覚めていた。

それでいて、じっとまどろみに浸（ひた）り続けていたい、そんなぬくもりを感じていた。

中島は感傷をふっ切るように、そっと瞼（まぶた）をあげた。

いつの間にか、両腕で弓子を抱きしめている。

その体からは、腐臭にかわって甘ずっぱい香気が漂ってくる。

「弓子……」

中島は、おそるおそる声をかけてみた。

静かな息づかいに反応はみられない。

けれども、たしかに弓子は甦（よみがえ）ったのだ。

ざくろのように裂けていた口元は可憐（かれん）に形を整え、わずかに開いた唇が、呼吸に合わせて小

刻みに震えている。
眼窩にはすでに形のいい瞼がもりあがり、頬はうっすらとピンクに染まりさえしている。はやる心を、清らかな気配が柔らかに包み込んだ。
「安心なさい。もうすぐ目覚めのときが来ます」
振り向くと、イザナミが立っていた。
緑色の返り血をこびりつかせた髪を振り乱してはいたものの、晴々と輝く瞳には中島の心を和ませる優しさが満ちていた。
「しばらくの間、この娘は私があずかりましょう」
女神が唇を開いた。
意外な申し出に、中島は戸惑っていた。
「悪魔との戦いにこの娘が耐えられるようになるまでの、わずかの間の辛抱です」
「悪魔との戦いですって？　もうロキは死んでしまったのではありませんか」
怪訝そうな中島を見るイザナミの目が、異様な輝きを帯びた。
女神はついと近寄ると、中島の手をとってじっとその瞳を見据えた。
中島の目の前の空間に白光が走り、視界からすべての色彩が消滅した。
イザナミの憂いに満ちた口調が、冷徹に現実を告げていた。
「見なさい、中島。この光景を……」
イザナミの指が中島の手を捉えたとき、白濁した空間に生々しいばかりの映像が浮かび上が

った。

そこには、見慣れた十聖高校のＣＡＩルームで、端末機に向かって必死に語りかけている小原の姿が認められた。

――ロキよ、なぜ答えてくれないのですか？

もの言わぬコンピュータに向かって、音声合成装置を握りしめる小原の映像が震えていた。

小原は何度も電源を入れ直しては、降魔のプログラムを走らせようと焦っていた。

だが、ホストコンピュータの磁気テープは、カタリとも動かない。

冷却用のファンの音だけが、ＣＡＩルームの静寂を乱していた。

ウッ。

小原が下腹部に手をあてて、かがみこんだ。

顔から血の気が引いている。

その白い襟足にもうっすらと鱗が生えはじめていた。

「あばれないで」

自分の体の内に潜む新たな生命に言いきかせるように、小原は呟いた。

祈るような面持ちでキーボードを叩き続ける小原を嘲るように、気紛れに磁気テープがカタカタと回転をはじめた。

――ロキなの？

小原の目が歓喜に輝いた。

音声合成装置を握る手に力がこもる。
——心配しておりました、ロキ様。
——…………。
磁気テープは躊躇（ちゅうちょ）を見せるかのように、回転を緩めた。
小原が不審げに首をかしげたとき、スピーカーから、低くかすれた声が響いてきた。
——わたしはセト。わたしを呼ぶのはお前か？
——セト？　私はロキ様を探しているのです。ロキよ、早く答えて下さい。
小原のヒステリックな声が、ＣＡＩルームに響きわたった。
——わたしの名はセト。異なる者の名を呼ぶとは、ふとどきな奴……。
イザナミが手を離すと同時に、中島の幻視は途切れ、かわって薄暗い空間が目の前に広がった。
こめかみに吹き出した汗が、首筋を伝う。
「セトといえば、エジプトの伝説に残る最強の邪神の名じゃないですか！」
中島の声は震えていた。
「セト一神ではありません。あなたの開いた魔界との通路の存在に気づいた多くの悪魔達が、人間界征服の野望をつのらせているのです。あなたを味方につけようと狙っている悪魔も決して一人や二人ではありますまい……」

イザナミの声は、荘厳な重みを伴っていた。
心の迷いを振り払うようにきつく瞼を閉じると、中島は口を開いた。
「すべては僕自身がまいた種です。この手で魔界との通路を閉ざすことが僕の使命なのでしょう」
頷(うなず)いた女神の表情が、心持ちなごんで見えた。
「つらくても、いずれはきっと報われる日が来ます。現世に降臨することを禁じられた私には、一緒に戦う力はありません。そのかわりに、あなたのもとにヒノカグツチを遣(つか)わしましょう。炎の剣となり、あなたの危ないときに強い力を授けてくれる神です。倭(やまと)の神の中でも抜きん出たその霊力は、きっとあなたの助けとなるでしょう」
イザナミの言葉に耳をかたむけながらも、中島の心は物言わぬ弓子を気づかう気持ちに満たされていた。
それを知ってか知らずか、女神は優しく中島の肩に手をかける。
「私の力をこの娘に授けます。そして、この娘が自分で自分の身を守れるようになったとき、あなたのもとに帰しましょう。それまで待ってくれますね？」
問いかけへの答えを待つまでもなく、イザナミは中島に背を向けた。
光の尾を引きながらゆっくりと花崗岩(かこうがん)の台に昇り立った女神は、今一度中島の方を振り返った。
「しばしのときの後、あなたの大切な方を迎えに、黄泉(よみ)の国の使いがやってきます。そのとき



が来るまで、束の間の逢瀬（おうせ）をお楽しみなさい」

微笑を残し、静かにイザナミは台の上に横たわった。

ふっとホログラフが消えるようにその姿がかき消えたとき、花崗岩の上には人の形にうっすらと灰がつもっていた。

「イザナミ……」

思わず女神の幻影を追った中島を、懐かしい声が呼びとめた。

「中島君、私のために約束を守ってくれたのね」

振り向くと、弓子の鳶色（とびいろ）の瞳が、限りない優しさをこめて中島を見つめていた。

その華奢（きゃしゃ）な、小憎らしいまでに無垢（むく）な存在が、中島の胸に熱い塊（かたまり）となって飛び込んで来た。

〈完〉

あとがき

二つの疑問に対する答えを模索していたら、いつの間にか小説になっていた。それがこの作品です。

一つは、〝コンピュータに代表されるハイテクノロジーは、本当に人間が独自(オリジナル)に作りあげたものなのだろうか〟という疑問。

レーザーや原子力と同じように、コンピュータもまた、最初は戦争の道具として実用化されました。

――人間が作り出した道具が、時として、生みの親である人間自身を苦しめるのはなぜだろう。もしかしたら、そこには人間以外の何者かの意志が働いているんじゃないか。

そんな妄想が、いつの間にか心の中に悪魔を描き出していました。――コンピュータに降臨する〝デジタル・デビル〟として。

コンピュータ理論と魔術理論の類似というテーマが、僕のオリジナルというわけではありま

せん。それどころか、アメリカには、それ専門の研究団体も存在するほどです。けれども、もしコンピュータ降魔が実現したら、その結果どうなるかを真剣に考えている人となると、まだいないんじゃないかな。

——考える方がバカだって？

でも、〝悪魔〟という言葉を、〝人間の邪悪な面を引き出す人工知能〟と置きかえたなら、この物語の何分の一かは、近未来に実際に起こっても不思議のないことではないでしょうか。

もう一つの疑問は、〝ギリシャ神話と日本神話は、なぜこんなに似てるんだろう〟ということ。

指摘する人は少ないけれど、天地創造から、神々のキャラクター設定、発生した事件に至るまで、二つの神話（ギリシャ神話の影響を受けた西欧のいくつかの神話を含め）は、驚くほど似かよっています。

——これだけ似かよった二つの神話体系に、共通の文化的基盤がないわけない。

——地理的に隔てられた二つの文化が、実は魔界でつながってるんじゃないか。

妄想ははてしなく広がり、北欧神話のロキにとどまらず、エジプトのセトまで登場させてしまいました。

ともかく、理屈ぬきに面白く読んでいただければ、作者としてはこんな嬉しいことはありません。

それから、北爪さん、素敵なイラストをありがとう。

ＰＳ
今、「女神転生」の続編を書いています。ご期待ください。

（付録）神々の系譜

〈イザナミ神・イザナギ神〉

日本神話で天地創造を行った夫婦の神です。最初、二人は力を合わせて国家を作りあげます。ところが、〝ヒノカグツチ〟という火の神を生んだイザナミ神は、そのときの傷がもとで死んでしまいます。

イザナギ神は嘆き悲しみ、黄泉の国まで妻を求めて旅立ちます。苦難の末、彼はイザナミ神を発見し、黄泉の国の神もイザナミ神を復活させることを承認しました。

そのとき、イザナミ神は夫に向かって、復活の準備が整うまで自分の姿を見ないでくれと哀願し、イザナギ神はそれを聞き入れます。

ところが、イザナギ神は待ちきれずに約束を破り、復活途中の妻の姿を覗き見てしまうのです。

溶けただれ蛆のわいた姿を見られたイザナミ神は激怒し、殺意を持って夫を追いかけます。黄泉醜女は、そのときイザナミ神の命令を受け、イザナギ神を追跡する女の鬼の総称です。

最終的にイザナギ神は現世にたどり着き、黄泉と現世をつなぐ道を塞いでしまいます。

妻の死・復活のための冥界行・復活の基本的合意・最後の詰めの甘さによる失敗・別離、と

いう話(ストーリー)は、ギリシャ神話のオルフェウスとエウリディケの物語にそっくりです。
ただオルフェウスとエウリディケは引き裂かれた後も互いを愛し続けるのですが、イザナミ・イザナギ神は憎しみをぶつけあうことになります。
ここからは僕の想像ですが、イザナミ神の怒りは、自分の醜い姿を見られたことによる、一時的なものではなかったかと思うのです。時がたち、イザナギ神への愛を忘れられぬ自分に気づいたとき、イザナミ神の強い性格からして、彼女が冥界におとなしく停っているとは考えられません。
愛する人と再び結ばれるまで、彼女は何度でも転生(てんせい)を繰り返すのではないでしょうか。
なお、イザナミ神の墓を飛鳥(あすか)にもってきたのは、僕の独断です。一般的には、出雲(いずも)の国と伯耆(ほうき)の国の境、比婆(ひば)の山にイザナミ神は葬られたと言われています。

〈ロキ〉
北欧神話で、美しき悪神として描かれています。もともとは、善悪両面を兼ね備えた、非常に人間的な神なのですが、ある事件を境に悪神としての評価が定着してしまいます。
ある事件とは、やはり死者復活にからむできごとなのですが……。
神の王＝オーディンの息子バルドルは、不死とされていましたが、ロキは彼の弱点を探り、事故を装い彼を殺してしまいます。
オーディンは嘆き悲しみ、なんとか息子を復活させようとします。

ギリシャ神話、日本神話と同じように、バルドルはあと一息で復活というところまでくるのですが、ロキの奸智(かんち)により復活できずに終わります。

怒った神々は、ロキの息子を殺し、その腸でロキを洞窟(どうくつ)の岩に縛りつけ、毒蛇の液が顔にしたたり落ちるという拷問(ごうもん)にかけるのです。

ロキの行動には、彼なりの必然性があったと思うのですが、なぜロキがバルドルの復活を邪魔したのか、北欧神話では詳しく書かれていません。

個人的には、この神様が好きなのですが、死者復活を邪魔するという点で、悪役(ヒール)に徹してもらいました。

〈ケルベロス〉

ギリシャ神話で、蛇の尾を持つ黄泉の国の番犬として描かれています。

冥界に入ってくる者には寛大で、冥界を出ていこうとする者は激しく吠えて逃がさないともいわれます。

死者の安易な復活を防止する看視役といったところでしょう。

ギリシャ神話に登場する回数は多いのですが、強いという以外、個性に関する記述は見あたりません。雇い主により、いかようにも変化する鉄人28号的性格の持ち主なのでしょう。

「デジタル・デビル・ストーリー」では、中島の忠実な部下として活躍してもらいます。

もし、悪魔を呼びだすなら、こういう類(たぐい)の悪魔でないと、人間には制御しきれないと思いま

すが……。

〈ヒノカグツチノ神〉

ヒノカグツチを生んだ傷がもとで母イザナミ神は死に、怒った父イザナギ神に斬り殺されるという、なんとも気の毒な神です。

意図して母を殺したわけではないのに、イザナミ神の死を彼のせいにするのは、あまりに気の毒な気がします。

他の神話体系では重要な位置をしめる火の神が、古事記で軽く扱われているのも不思議です。「デジタル・デビル・ストーリー」では、黄泉の国の母に忠誠を誓い、炎と剣の神として中島を助けてもらいます。

〈セト〉

エジプト神話の悪神です。

エジプト神話には、オシリス・イシスという日本のイザナギ神・イザナミ神にあたる神がいます。オシリスは男性神、イシスは女性神です。

セトはオシリスの実力をねたみ、彼を特殊な箱に入れて殺し、死体を箱ごとナイル川に投げこんでしまいます。

イシスは苦難の末に夫の死体を取り戻し、その精を受けて子供をみごもります。これがホル

スという神です。
セトはホルスとも戦いますが、最終的にはホルスに敗れます。デジタル・デビルになったセトがどんな悪業を行い、どうやって中島と戦うか考えるのもなかなか楽しいもんです。

（西谷史）

アニメージュ文庫

デジタル・デビル・ストーリー

女神転生（めがみてんせい）

N-013

1986年3月31日　初版

著者　西谷史（にしたにあや）
発行者　尾形英夫（おがたひでお）
東京都港区新橋四—一〇—一〒一〇五
発行所　株式会社徳間書店
電話〇三(四三二)六二三一(大代)
振替　東京四—四四三九二番
印刷　大日本印刷株式会社
製本
〈編集担当　高橋　望〉

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

ISBN4-19-669552-3C0174（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

アニメージュ文庫は

AMJuJuと

呼んでください。

●JuJuには6つの部門があります。

NOVEL

アニメ作品の小説化が原則だけど、しばらくたったらオリジナルにも挑戦します。

CHARACTER

人気キャラクターの個人写真集。ピンナップや名場面がいっぱい載っています。

FILM

傑作アニメのフィルム文庫。コマを豊富に使用したオールカラー版です。

PEOPLE

アニメーター、演出家、脚本家など、この1冊で、その人のすべてがわかります。

THE BEST

「アニメージュ」で、好評のうちに連載終了したもの、およびオリジナル作品。

SFX

アニメージュ文庫の新シリーズ。主に特撮ものを扱う予定です。

カバーイラスト＝北爪宏幸
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱

徳間書店
アニメージュ文庫
ISBN4-19-669552-3 C0174 ¥380E 定価380円

